

遂にその申込みを承諾した。これは勿論私の手で、一時間と経たぬ中に彼の借金は今までの四倍にもなつた。そして彼の酒のために仄かに上氣してゐた顔色は、次第に血の氣を失つて行つて、その中に物凄いまでに蒼ざめてしまつたのに私は驚かされた、何故と言つて、私が入念に探索したところに依れば、この成金貴族は素晴らしい分限者で、成程彼が今此の場で失つた賭金は相當巨額なものには違ひないが、彼にとつてはそれ程の打撃とも考へられないし、況んやこんなにも彼が力を落とさうなどとは全く思ひがけないことだつたのである。酒を飲み過ぎた故ではあるまいかと私は思ひ返した。が、さて私は、自分を信用してゐてくれる仲間たちの前で私の正體が暴露するのを氣遣つて、ただそれだけの動機で、もう勝負を切り上げることを言ひ出さうとした。するとその時私の直ぐ傍にゐた仲間の顔色が變つた。グレンディングは忽ち、絶望の叫びを放つた。私は彼が全く破産して一同の隣れみの的となつて、しかもそれ等の人々は彼を私の毒牙から救ひたがつてゐることを覺つた。

かうなると、私はどうしてよいものやら、迷はざるを得ない。いかさまに引掛つた男の哀れな様子に、部屋中白け渡つて、息づまるやうな沈黙が續いた。その間、私は放蕩學生の中でも比較的善良な連中の輕侮や非難の籠つた視線に射すくめられて頬のあたりを刺されるやうな感じがした。そして事實その次に起つた意外な出來事のために、最早や堪へ難くなつた重苦しさも、一時和げられてホツとした程であることも私は白狀する。この部屋の廣い重い折戸が、その時周章だしく力一ぱいに押し開かれると、その拍子にまるで魔法か何ぞのやうに部屋中の蠟燭は悉く消されてしまつたのである。

まさに消え盡す瞬間に、私は、辛うじて、外套に身を包んだ私と同じ位の脊恰好の見知らぬ男が部屋に入つて來るのを認め得たのである。併し、直ぐに眞暗になつてしまつたので、我々は唯その男が部屋の中央に立つてゐること感ずるばかりであつた。一座は盡くこの不作法な行爲に呆れるのみだつたが、この驚きの靜まらぬ中に、早くも闖入者の叫ぶ聲が聞えるのである。

「諸君」と彼は低い明瞭な、忘れ得ぬ、あのゾツと骨髓に沁み渡る囁き聲で言つた。「諸君、私はこの不禮な仕打について何もお詫び致しません。何故と言つて、斯うした振舞ひを敢へてするのも、實は一つの義務を果たすことになるからであります。諸君は、今までエカルテでグレンディング卿から金を強か捲き上げた男が如何なる男か大方御存知ないとお見受け致します。そこで、私は諸君にこの肝腎なる知識を得るための、最も手つ取り早い確實なる方法を御傳へ申さう。皆様御隨意にこの男の左のカフスの内側と、刺繡のあるモーニング・ラッパアの廣いポケットの中に藏つた骨牌の小さな束を、おあらため下さい。」

彼が斯う言つてゐる間、一座の沈黙はピンの落ちる音も聞えるほど深かつた。言ひをへると、男は這入つて來たときと同様に周章ただしく出て行つてしまつた。そのときの私の感情を、私は書き記せるであらうか？——死刑を宣告された者の恐怖などと、私は述べねばならぬのであらうか？ 併し考へてゐる暇などのなかつたことだけは何より確かである。忽ち大勢の手が私を引摺み、さうして蠟燭には直ぐ火がともされた。私はその場で身體検査を行はれた。袖口の裏からは「エカルテ」に必要

な澤山の繪札が発見され、ラッパアのポケットには幾組かの骨牌の束が発見された。ただ少し違つてゐるのは、私の骨牌札はその道の立人の間で通稱「アロンデ」と言はれる種類のものであつた。この札は繪札とエースに限つて縦の端が少しばかり出張つてゐて、竝の札は皆左右がちよつと凸出してゐるのである。つまりこの仕組みを知らない素人は、何時ものやうに骨牌を縦にきるから、必ず相手に繪札及びエースを渡すことになるし、反對にいかさま師の方では横に切るからどうしても相手にかす札ばかりを渡すやうになるのである。

この事實が露見すると、暫く皆の者は黙つて、ぢつと、輕蔑しきつた皮肉な様子をして見せたが、そのことは私にとつて、いつそ大童になつて憤慨されるよりも遙に我慢がならなかつた。

「キルスン君」部屋の主人は身を屈めて、脚許から、非常に贅澤な珍奇な毛皮の外套を取り上げながら言ふのであつた。「キルスン君、これは君の物だ。」(寒い日だったので、私はラッパアの上から外套を羽織つて来て、この部屋へ入つた時にそれを脱いで置いたのである)「こゝに、これ以上君の凄い計略を探がす必要もあるまい。」(彼は苦々しい微笑と共に、外套の壁を見ながらさう言つた。)「もうあれだけで充分だ。君はもうオックスフォードにはゐられないことが解つたらうな——少くとも、僕の部屋からは、たつた今出て行つて貰ひたい。」

私はもうすつかり面目を失つて、居堪まらない氣持がしたので、あたり前ならばこの罵言に報ゆるために敢へて暴力に依つたかも知れないだが、其時恰度私の注意は悉く、洵に言語道斷な驚くべき

或る事實に集注されてしまつた。私の外套は元來世にも珍しい毛皮なのだが、併しその珍奇や高價は兎も角として、その仕立て方まで私の妙な好みに依つて誂へた頗る凝つたものである。私はもともと、こんなつまらない事にかけては莫迦々々しく洒落者だつたから。それで、プレストン君がそれを床から拾ひ上げて、折屏のところまで近寄つて来た時に、私は殆ど竦み上がる程の驚きを以つて、既に私の腕に掛けてあつた(勿論無意識の中に掛けたのだらうが)自分の外套をまぢまぢと眺めた。プレストンが私の前に差し出した奴は、實に何から何まで寸分違はぬ私の外套の複製に他ならなかつたではないか。私の化の皮を無残にも引き剥いだあの忌々しい男が外套にくるまつてゐたことを私は憶えてゐる。そして、此處に集まつた仲間の中には、私以外に外套を着て来たものはなかつた。私は出来るだけ氣を押し鎮めると、友が差し出した外套を受取つて、素早く他の者たちの氣付かない中に、それを自分の外套の上から引つかけて、苦々しい聲で相手を見据ゑながら、室を出た。そして、その朝未だ明け切らぬ中に、恐怖と恥辱とに堪へ兼ねて、追はれるやうにオックスフォードから大陸へ向けて旅立つた。

私は空しく逃げ廻つた。意地の悪い運命は意氣揚々として、私を追ひかけて来た。しかも、その不可思議な支配は漸く動き始めたばかりであることがわかつた。巴里へ着くや否や、私はもうキルスンが、私に忌々しいおせつかいをしたがつてゐることの新たな徴候を発見した。數年は徒に過ぎ去つたが、私の心は些も救はれなかつた。惡黨めが！——羅馬では、全く思ひがけぬ時に、實に氣味

の悪い不思議な横槍で、私の野心を見事に打ち砕いてしまった。維納でも、柏林でも。また莫斯科でさへも！ 事實、彼を呪はずには居られぬ忌々しい事件が惹起されずに済んだ土地とはなかつた。私はまるで疫病にでも襲はれたやうに何處へ行つても彼の測り知れぬ暴虐から、周章狼狽して逃げ出した。そして、世界の果てまでも、甲斐なく逃げ廻つたのである。

幾度も幾度も繰り返して、私はひそかに心に問うてみた。「そもそも何者だらう？ — 何處から來るのであらう？ — 何が目的なのであらう？」と。だが、何の解答も得られなかつた。そこで私は、非常に綿密に、丹念に、彼の無禮極まる監視の形式、方法、或はその主なる特性等に就いて穿鑿を重ねた。併し、斯ることすら、何等纏まりのつく、合點の行くべき推測は見出されなかつた。唯、彼がこの頃頻々と私の妨害をする場合は、大抵その計畫を挫折させ、實行の邪魔立てをする以上に出ないことだけを知つた。しかも、私の計畫が満足に成功すれば極めて悪い結果を惹き起したに相違ないやうな場合に限つて、さうであつた。だが、それ位のことでは、彼の横暴極まりない權勢を我慢しなければならぬのであらうか！ その位の補償で、彼奴が私の當然な自由行動の權利をあんなに執拗に侮辱的に侵害するのを諦められようか！

また私は相手が久しい間、(驚くべき周到さで、物好き千萬にも、巧みに私の服装を真似てゐたが)私の行動に干渉する折には、必ずその顔を見られぬやうに力めてゐると言ふことも認めないわけにはいかなかつた。假令キルスンが如何なる人間であらうとも、この用心だけは妙くとも、卑劣極る

小癩ものであつた。イートンに於ける我が警告者、オックスフォードに於ける我が名譽の破壊者、そして羅馬に於いて我が野心をくじき、巴里に於いて我が復讐に横槍を入れ、ナポリに於いて戀を妨げ、埃及に於いては彼が小賢くしも貪慾と名づけた我が行爲の邪魔立てをしてのけた男、この私の大敵であり、奸智に丈けた彼が、學童時代のキリアム・キルスン——かの同性同名の生徒、學友、競争者——フランスバイ博士の學校に於ける憎むべく且つ怖るべき競争者——であることも、私が見抜き能はなかつたと、苟にも想像し得たであらうか？ 否、斷じて！ — 併し、私は急いで、この戯曲の最も奇怪なる大詰を語ることにしよう。

これまでのところ私は、彼の專横なる支配の前に意氣地なく屈服して來た。私が常にキルスンの高尚なる人格と比ない叡智と、全智全能とも思へる力に對して抱いてゐた深い敬畏の感じは、彼の眞實の性質と私の想像がつけ加へた性質との底に潜んである或る特徴が私に及ぼした恐怖の情と相俟つて我が身の無力さを深く味はさせ、彼の横暴極まりない意志に嫌々ながらも屈從するより他ないと諦めさせてゐた。それに近頃では、私はいよいよ酒に浸りきつて、持ち前の遺傳的な氣質に酒の狂的な作用が加はつて、益々自制力を失ふやうになつてしまつた。私はぶつ／＼不平を鳴らし、彼の命令に従ふことを一層逡巡し、反抗したりするやうになつた。そして、自分の力が増せば増す程、敵の力がそれに比例して弱まつて行くやうに、私を信じさせたのは單なる氣の故に過ぎなかつたのであらうか。それは兎に角として、やがて私は燃えるやうな希望を心に感じ始め、遂に胸中私かに、もうこれから

は決して彼奴のおせつかいを受けるやうな眞似はすまいと、頑強に必死の決心を固むるに到つた。
一千八百——年の謝肉祭の眞中、私は羅馬にあつて、ナポリ侯ディプロリオ侯の假裝舞踏會に出席した。その日、私は何時もより餘分に酒の酔ひが廻つてゐたので、人々の混み合つた室内のむせかへるやうな空気が、到底我慢のならない程私を苛ら立たせた。それにござつた返してゐる群衆の間をかき分けて行くことの厄介さ加減も、鈔からず私の氣持を焦々させるのに力あつた。と言ふのは、私は（香しからぬ動機であつたことは言ふまでもないのだが）年をとり過ぎて耄碌したディプロリオ侯の、若くて陽氣な美しい夫人を熱心に探がしまはつてゐたのである。彼女は無謀にも、當日の舞踏會に自分と認められたので、大急ぎで彼女の傍へ寄りそつて行かうとしてゐたのである。恰度その途端に、私は軽く私の肩を抑へる手を感じたと思ふと、夢にも忘れられなかつた、あの低い忌はしい囁き聲が私の耳に注がれた。

私は憤怒に氣も狂ほしく、いきなり私の邪魔をした男の方を振り向くと、きゆつと彼の素つ首を引搦んだ。彼は果たせる哉、私と寸分違はぬ假裝をしてゐた。青天鷲絨の西班牙外套を羽織り、腰に巻いた鮮紅色の帯には細身の長劍を吊つてゐた。そして眞黒の絹の假面で顔をすつかり蔽つてゐた。

「蓄生奴！」私は怒りに聲を嗶らして叫んだ。其一語一語が、更に私の憤怒の炎を烈しく燃え立たせた。「忌々しい奴め！ 詐欺師奴！ 惡黨奴！ 貴様などに死ぬまで跡をつけ廻されて堪るものか！

俺について来い。厭と言ふなら、この場でたつた一突きに刺し殺してしまふぞ！」——私は舞踏室から、格別抵抗しようともしない彼を隣の控の間へ曳きすり込んだ。

そこへ這入りざま、私は力一つばいに彼を突きとばした。彼が踴躍いて壁にぶつかつてゐる隙に、私は荒々しく叫きながら、扉を閉めてしまふと、彼に劍を抜くことを命令した。彼は暫く躊躇つてゐたが、遂に微かな溜息と共に無言のまま、劍の鞘を拂つて、防ぐ身構へをした。

決闘は短かつた。有ゆる極度の興奮に猛り立つた私は、隻手に千萬人の銳氣を覺えてゐた。私は瞬く間に、彼を壁板まで一氣に押しつけ、身動きのならない程にして置いてから、幾回となく繰り返して繰り返してその胸に劍を突き刺した。

その時、何者か扉の鑿をがちやつかせる音がしたので、私は大急ぎでその閉まりをして、直ぐにまた氣息奄々たる敵の傍へ取つて返した。だが、その途端に私の眼に映した光景が私に與へた、その驚愕と恐怖とを、如何なる言葉が充分に言ひ表はし得やうぞ！ 鳥渡眼を外らした僅の暇に、部屋の上の方の部分の向うの端の調度が、がらりと一變してしまつたではないか。大きな鏡が——最初私の狼狽した眼にはさう見えなかつた——つい今し方までは何もなかつたところ立つてゐるのであつた。そして私が底知れぬ恐怖に竦みながら其處へ歩み寄ると、鏡に映つた私自身の姿が、青ざめた顔をして血に塗みれ、踴躍たる危い足どりで、私の方を向いて進んで來るではないか。

と、そんな風に見えたのだが、實はさうではなかつた。それは私の敵手だつた——それはキルスン

に他ならなかつた。彼はその時斷末魔の苦しみに悶えながら、私の前に立つてゐた。彼の假面も外套も床の上へ投げ棄てられてあつた。彼の衣物の絲一本にしても——彼の顔の特色ある奇怪な相好の筋さへも、完全に私のそれと一致しないものはなかつた！それはキルスンだ、併し彼は最早や嘔聲では物を言はなかつた。私は彼が喋る中に、私自身が話しかけてゐるのではないかと思つた。「お前が勝つた、そして俺は降参した。だが、今日限りお前もやつぱり死んでしまつたのだぞ——現世から、天國から、希望から！お前は俺の内に生きて來たのだ——そして俺の死と共に、如何にお前が手際よくお前自身を刺し殺してしまつたかを、お前自身に他ならぬこの姿でよく見るがいゝ。」

—終—

ポ—集終

シヨバンの葬送曲

一

「私はこれでも迷信家ぢやないつもりですよ。すくなくともあなた方ほどはね。」

ホウザアはまるで自分の迷信を非難でもされたかのやうに突然口を開いた。

「あなた方醫師諸君、即ち、あなた方がさう呼ばれるのを好む科學者ほどねえ。」

「科學者の或る者は却つて靈魂不朽説や、あからさまに幽霊と正面切つて言ふほどの勇氣もないのに、なにかさうした異形の出現を信じたがるものですね。」

「ところで私の迷信と言ふものはそれ程甚いものぢやないのです。——だがかう言ふ程度の信念、つまり人間と言ふものはかつて住んでゐた處のそれも非常に永く住んでゐて彼の周圍のあらゆる物體に彼の陰影を強烈にことごとく染みこませてしまつた、と言ふやうな場所には、彼が既に居なくなつてからでも、なほ出現することがあり得ると言ふことです。」

「或る人間の周圍の物象は、其人間が居なくなつてからも、永いこと、他の人の眼に、彼自身の映像を浮び出せることがあり得る程そんなにも深くその人格に依つて變質させられるものだと言ふことを私は實際知つてゐるのですよ。」

「もとよりさう言ふ影響力の強甚な人格は、それ自身一本な人格でなければならぬ。それと同時に、その映像を認める眼も等しく正確な眼であらねばならないのです。——たとへば私の眼のやうにですな。」

「でその正確な眼が不正確な頭脳に驚愕を與へる譯ですかね。」
と醫師フレイリーは微笑した。

「ありがたう。人は期待が充足されるのを悦ぶものです。であなたからそれに就いての慇懃な御返事をゆつくり承りたいんですが。」

「お待ちください。あなたはおつしやいましたね、御自身知つてると。それこそ先づ大いに問題ぢやありませんかね。どうしてそれを知るにいたつたか、多分、あなたは説明の勞を御厭ひにならんでせうな。」

「あなたはそれをハルシネイション——錯覺と言ふでせう。」
ホウヴァは續けた。

「だが、それはどうでもいゝ。去年の夏、私は御承知のやうに、メリデアン村で避暑しました。ちやうど私が泊るつもりで行つた親戚先きが病氣でしてね。仕方なくほかを探しました。相當骨折つて一軒さがし當てました。マナリングと言ふ變人の醫者が以前住んでゐたと言ふ空家でした。その醫者は數年前、其處を去つて行方がわからないのです。彼の代理人までが知らない始末ですからね。彼は自

分でその家を建て、老僕と一緒に十年ほど住んでゐたさうです。彼の商賣も、あまり流行らなかつたと見えて、二三年して、すっかりやめて仕舞つたさうです。それと同時に一切の社會生活から退いてまつたくの隱者になつてしまひました。彼と多少なりと關係があつたと言はれる唯一の人である村醫の話では、その退隱中マナリング氏は、たつた一つの研究題目に彼自身をことごとく獻けつくしてゐたと言ふことです。氏はその結果を書物にして世に問うたが、同業者の共鳴は購ひ得なかつた。彼等は、マナリング氏をして氣が觸れてゐたと思つたさうです。私はその書物を讀んだことはなし、その表題も今は忘れてしまひましたが、何んでもそれが、素晴らしく新奇な論說であると言ふことだけは聞きました。彼はかう言ふ説——健康體の人に就いてなら多くの場合、極めて的確にその死を數ヶ月前に豫知し得ると言ふことを把持してゐたさうです。何んでもその範圍は十八ヶ月だつたと思ひますよ。いまでもあの地方にはマナリング氏の豫知——あなた方に言はせれば大方斷——の力を立證する幾つかの物語が残つてゐます。どの例をとつて見てもマナリング氏の警告した人達は、かならずその指定された時日に突然死にました。別にこれと言ふ原因もなしにです。しかし、かう言ふことは私の言はうとするところでは少しもないんです。たゞお醫者さんには一寸面白いかと思ひましてね。

「閑話休題、私の新規に借りた家と言ふのは、マナリング氏が住み棄てたそつくりそのまゝの様子をしてゐました。それは隱者でもなく研究生でもないものにとつては鳥渡陰氣すぎました。で、私は思

ひましたよ。この家の性格——と言ふよりも前住者の性格が幾分私に傳染したのだと言ふ風にね。と言ふのは、私はその家に移つてから始終一種のメランコリーに囚はれてゐたからです、元來そのメランコリーは私の生れつきの性情にはない筈だし、またそれは私が獨りぼつちで居る爲とも思はれませんでした。私はその家に寢泊りする下僕を使つてゐませんでした。が、それまでは御承知のとほり研究などはないにしても讀書に耽つては、私みづからの世界を樂しんでゐたものです。なにしろその原因はどうでも、其處に移つた結果はがつくり氣落ちがして、なにか憑ものでもしたやうに妙にさむざむとして來たのです。これがマナリング氏の書齋では、家中で採光の工合、風通しの加減が一番良いと思はれるにもかゝらず、一層ひどいのです。

「等身大に油で描かれたマナリング氏の肖像が掛けられてあつて、それがこの部屋を全く支配してゐるやうに見えました。その肖像には、特に風變りな處はありませんでした。五十がらみの、なかなかの美男で、鐵灰色の頭髮、剃り込んだ澤々しい顔、さうして暗い端嚴な眼、私は始終その肖像の中の或る物に心が索かれてしまつた。この男の相貌が私には親しいものになりましたと言ふよりもそれが私の心を次第に追ひかけ始めました。

「ある夕方、私は此の書齋を横切つて寢室に行かうとしました。燈をもつて——メリデアン村には瓦斯はありませんでしたからね。私はいつものやうにこの肖像の前で立ち停りました。それはランプの光りの所爲か、新しい表情をしたやうに思ひました。何と言ひますか、鳥渡名狀しがたい、鬼氣と

言つた氣持ちでした。私はやゝ心を動かしましたが怖がつたわけではないのです。私はランプを持ち變へました。さうして違つた方向からそれをもう一度照らしてみました。さうやつてゐる中に、急に後を振り返つて見たい氣持ちが閃いたので。そこで私は振りかへりました。と一人の男がその部屋を横切つてまつすぐに私の方へやつてくるのを見たのです。ランプの光りの届く圈内まで來たので、その男の顔を覗き込みますと、それがマナリング氏なのです。肖像畫がそのまゝ歩いてきたときや思へなかつたのです。」

「もしもし。」

私はやゝ冷たくかう言ひました。

「あなたはノックなさつたかも知れませんが私には聞えませんでしたよ。」

彼は私の手の届く位の處を通りました。彼は何かかう警告でもするやうに人差指をあげました。さうして一言も言はずに出て行きました。——それが極く短い時間、つまり彼の這入つてくるのと出て行くのが殆ど同時と言ひたい位でした。」

「無論、これが私なら『幽霊』さながらな錯覺と呼ぶ處のものである事は言ふまでもありません。この部屋には二つの戸口しかないので。一方は堅く錠が下りてゐました、他の一つが寢室に通じてゐました。さうして寢室から外へ出る口はないのです。然し、これを自覺する感情は私のこの小話では重大なものではないです。」

「疑もなく、あなたにとつて、これは極く平凡な怪談でしかないでせう。藝術家に依つて書きおろされるいつもの常套的な筋書でしかありませんね。ですから、たとへこれが事實にしても單なる怪談でしかなかつたならば、私はお話する氣はなかつたのです。所が、マナリング氏は死んだのではなかつたのです。私は今日ユニオン街で彼に逢ひました。彼は群集にまぎれて私の前を通りましたよ。」
ホウヴァアの話はこれで終つた。二人とも黙つてしまつた。醫師フレイリーは放心したやうに卓子を指先で叩いてゐたが、やがて口を開いた。

「マナリング氏は今日あなたに何か言ひやしませんでしたかね。何か、彼が死んだのではないと言ふ事を確實に推理し得るやうな何かを——」

ホウヴァアは一所をぢつと凝視して何事も返事をしなかつた。

「多分。」フレイリーは續けた。

「多分、彼は、合圖か身振をしたでせう——指をあげてね。かう警告でもするやうな工合に——それは彼の技術——何か重大な事柄を言はうとする時の——たとへば所謂豫斷でも告げようとする時の癖ですよ。」

「さう、やりました。恰度あの幽霊がしたと同じやうに、だが妙だな。あなたは彼を知つてゐるんですか？」

ホウヴァアは明らかに神經的になりかけてゐた。

「え、知つてをります。私は彼の著作を讀んだことがありました。それに又他日あらゆる醫者がそれを讀むやうになるでせう。それは少くとも、醫學に對する、今世紀の最も駭世的な、重大な文獻の一つと思ひます。三年前、彼の病床に私は立ち會つたことがあるのです。彼は死にましたよ。」

ホウヴァアは椅子から飛びあがつた。彼はすつかり惑亂してゐた。彼は部屋中を大股に歩き始めた。と、彼は醫師フレイリーの方に近づいてきた。さうして嘎れた聲で呟いた。

「先生、あなたは何か私に言ふことがおありですか——醫師として。」

「いや、ホウヴァア君、あなたは私の知つてゐる、最も壯健な人です。友人として私はあなたに御自分の御部屋に御歸りになる事を、お勧めしますよ。あなたは天使のやうに、ヴァイオリンを弾く事が出来るぢやありませんか。ですからそれをお弾きなさい。何か輕快で、潑刺たる曲をおやりになるんですよ。さうやつて、あなたの胸から、その呪はれたいまましい熱心事を拂ひのけるんですよ。」

二

翌日、ホウヴァアは自分の部屋で死んでゐた。ヴァイオリンを頸にあてたまゝ——弓は弦の上にあつた。譜本は彼の前に、シヨパンの葬送曲を擴げたまゝ置かれてあつた。

夏の一夜

埋葬されたといふその事實も、ヘンリー・アームストロングにとつては、自分が死んだのだといふ證據にはならないらしかつた。平常から、彼は、物事を容易に信じない人間だつた。ほんたうに埋葬されたのだ、といふその事だけは、彼の官能が證人となつて、彼に強ひてそれを認めさせた。彼の姿勢——板を背とし、兩手を喉の上で組合せ、少しもその位置を動かさないでも、容易に切れさうな、何ものかで縛られてゐる——嚴重な幽閉、墨のやうな暗黒、深い沈黙、それ等の事實は、反駁するところを許さない證據そのものだつた。それに就いては、彼も異議なく受け入れた。

然し、死。——それは違ふ。彼はたゞ、大へん、大へん、病氣が悪いのだ。彼は病弱者の、臆した意識よりほかには何物ももたず、自分の上に振り掛つて來たその世の常ならぬ運命に對しても、さして心を痛めはしなかつた。無論彼は哲學者ではなかつた。——たゞの、平凡な、常識的な、そして、恰もその時には、病理學に對しても、至つて無關心な、一人の人間に過ぎなかつた。彼が非常に怖れてゐた器官は、その感覺を失つてゐた。だから、彼は、近き將來に對しても、少しも特別の危懼を感じはしないで、ぐつぐつと眠りに落ちた。そして、ヘンリー・アームストロングを取巻いて、總てのものは平和だつた。

しかし、頭の上では何事か進行してゐた。それは、眞暗な夏の夜だつた。稻妻のひらめきが、しばしば、音もなく、西のはうに垂れこめてゐる雲を焼いた。嵐が來さうであつた。これ等の一閃は、イルミネーションをまた、かせながら、墓地の記念碑や、墓笠石なんぞを、おそろしい明白さを以つて、畫きだした。そして、それ等のものを、をどりださせさうに見えた。それは、正氣のものなら、とてもこのんで、墓地なんぞを、さ迷ふことの出来る夜ではなかつた。だから、其處で、ヘンリー・アームストロングの墓をあばいてゐた三人の男達が何の危険も感じなかつたのは、最もだつた。

彼等のうちの二人は、數哩彼方なる醫學校から來た若い學生だつた。三番目のは、ジェスといふ名で知られてゐる大男の黒ん坊だつた。長い間、ジェスは墓地のまはりに、何でも屋として雇はれて來た。そして「そこにゐる總ての靈魂」を知つてゐるといふのが、彼のお得意の冗談だつた。彼の今してゐる仕事から推して、その場所が、死亡登記簿も多分示してゐるだらうが、さう賑やかなところではないことは、容易に推察することが出來た。

塀の外側には、公衆道路から、一番懸離れた土地の一隅に、馬とぼろくの車とが、待つてゐた。發掘の作業は、さう困難ではなかつた。數時間前に、やはらかく墓を満したばかりの土地は、手筈へもなく、直ぐに掘り上げられた。墓穴から、柩を取り出すことは、それほど容易ではなかつた。しかしそれは取り出された。それが、ジェスの臨時収入となるのだつた。彼は氣をつけて蓋の栓釘をとると、それを傍へのけた。黒いズボンと、白いシャツのからださがさらされた。そのとたん、空氣が

炎と跳ね、雷の霹靂が世界を轟し、そして、ヘンリー・アームストロングが静におきなほつた。

呂律も廻らぬ叫びを擧げて、男たちは、恐怖のうちに、各々違つた方角へ逃げて行つた。世の何ものを以てしても、彼らのうちの二人を、引返へすやうに説伏せることは出来なかつた。然し、ジェスは異つた種族の人間だつた。

朝の灰色の中に、心配のために憔悴、蒼ざめ、彼らの冒険の恐しさから、未だに血をかき亂してゐた二人の學生たちは、醫學校で落遇つた。

「あれを見た？」一人が叫んだ。

「お、見たとも——どうしたらいいのだらう。」

彼らは建物の後部の方へ廻つて行つた。そこに彼らは、ぼろ馬車に取りつけられた一頭の馬が、解剖室の扉の側の門柱に繋がれてゐるのを見た。機械的に彼らは、その室へ這入つて行つた。汚い薄くらがりの中のベンチに、黒ん坊のジェスが坐つてゐた。彼は、すつかり眼と齒とをむき出して、にやにやと笑ひながら立上つた。

「俺ア、褒美を貰ひてえと思つて、待つて居ましただよ。」と彼は言つた。

長いテーブルの上に、彼の一撃のため、頭を血と泥とで汚した、ヘンリー・アームストロングの體が、露に伸びて、横はつてゐた。

——終——

雙生兒

故モーティマー・パー氏の書類中に發見されたる手紙

雙生兒のかたはれとしての私の経験の中に、我々が馴染んでゐる自然律では、全く解し難い何ごつかを認識した事はないかとお訊ねでございます。然し、この事に關しては貴下にもお分り下さるでせう。恐らく我々は、必ずしも同一の自然律に馴染んでゐるわけではありませんまい。私の知らないものゝを貴下は御存知であり、そして、私にとつては不可解な事も、貴下にとつては至極明瞭であるかも知れません。

貴下は兄弟のジョーンを御存知でした。——といふ事はつまり、私の居ないといふ事を知つてゐる時に限つて、貴下は彼を御存知でしたといふ事になります。然し私の信ずる所では、貴下ばかりでなく、如何なる生きとして生けるものと雖も、我々がお互ひに似せ合はうと努めた場合には、彼と私とを區別する事は出来なかつたであります。私の両親ですら出来ませんでした。我々こそは、私の知れる限り、かくの如く酷似せる場合に於ける唯一の實例であります。私は兄弟のジョーンに就いてお話を致しますが、然し私自身、彼の名前がヘンリーでなく、私のジョーンでないとは明瞭に言切れないのです。私たちは世間並みの洗禮を受けました。然し後になつて、我々を區別する爲の小さな刺

青をする時に當つて、手術者は考へ違ひをしたのです。そして私は前膊に小さな(H)を帯び、彼は(J)を帯びたにも拘らず、如何なる方法を以つてしても、是等の文字は置き換へる事が出来なかつたのであります。私たちの少年時代、両親は私たちの着物だの、他の簡単な模様だのによつて、より明瞭と私たちを區別しようと思ひました。然し私たちは全く屢々衣裳を交換する事が出来ましたし、その他、遂に彼等がこの効果のない試みを放棄するに至るまで、敵を陥弄に陥れました。かくして私たちは共に家に住んである年中、總ての人々は形成の困難なる事を認め、せめてもそれを最も好くする爲に我々を一緒に、(ジェンリイ)と呼ぶに至りました。私はよく、我々のこの無價値なる額に、明瞭に極印を押さうとはしない父の寛容に就いて疑ひを抱いたものです。然し我々は我慢のし得る程度に於いて善良なる少年でありましたし、我々の邪魔とごたくの能力も褒められていゝ程度の控へ目を以つて應用してゐましたので、燻鑊から逃れる事が出来たのです。私の父は、事實、單純に善良な性質の男でした。そして私は心ひそかに大自然の實際的な諧謔を楽しんでゐたやうです。

我々がカリフォルニヤへやつて来て、サン・ホゼに居を構へてより幾何も経たぬうちに(此處で私たちを待つてゐた幸運と言へば、唯貴下のやうな御親切な友達にお眼にかゝれたといふ事だけです)貴下も御承知の通り、一週間のうちに相繼いで両親が亡くなつた事によつて一家は没落いたしました。父は破産のうちに死んだので家邸は借金犠牲となりました。姉妹たちは東都にある親戚のもとに還りましたけれども、當時二十二歳であつたジョンと私とは、貴下の御親切の御影でサンフラン

シスコの別々の方面で職を得ることが出来たのです。事情は私たちを一緒に住ふことを許しませんでした。私たちはほんの時々しか相見ることが出来なくなりました。時には一週間に一度きり會はないこともあつたのです。私たちは通例として極く僅かの知人しか持つてゐませんでしたので、私たちのあの異常な相似についてはあまり知られてゐなかつたのです。さて貴下のお訊ねの問題の點まで来たやうです。

この都會へ来て間もなくの事、一日私はマーケット街を晝遅く歩いて居りました。その時立派な服装をした中年の紳士に話しかけられたのです。

「ステイツンズ君、君があまり外出しない事はよく知つてゐるがね。ところが私は君の事を家内に話して聞かせたのだよ。すると彼女は君に是非来て戴きたいと言ふのだ。私の又思ふのに、娘たちも知つて置いて貰つてもいゝと思ふよ。明日七時にやつて来て我々と一緒に晚餐をやりませんか。二三、そして若し御婦人たちが君を満足させる事が出来なかつたら、その時は私が玉突きを數番お手にするために踏止つてもいゝですよ。」

これ等の言葉は大へん明るい微笑と誘惑的な態度とを以つて語られたので、私はどうしても斷る事が出来ませんでした。そこで私は今までこの人を見た事は一度もなかつたにも拘らず、即座に答へたのです。

「結構でございます、貴下。御招待をお受けする事は大変喜ばしい事でございます。何卒マーゴ

ヴァン夫人によろしくお傳へ下さいませ。」

握手を交し、愉快な別れの言葉を残してその男は立ち去りました。彼が私の兄弟と私とを間違へたのである事は至つて明瞭でありました。私はその種の間違ひには慣れつこになつてゐましたし、そしてあまり重要な用件でない場合には、強ひて相手の間違ひを訂正しようとはしないのが私の習慣でした。然し私はどうしてその男の名がマーゴヴァンである事を知つてゐたのでせうか。名前といふものが無闇に適中するものではありません。假令それが正しかつたらしいにしても、實際のところ、その名前はその男と同じく私にとつては馴染みのないものであります。

その翌朝私は兄弟の雇はれてゐる處へ駆着けますと、折よく彼が澤山の傳票を持つて事務所から出て來るところへ出會しました。私は如何にして自分が彼の役割を演じたかといふ事を話し、そして彼がこの約束を守る事を欲しないならば、私は喜んでこの身代りを續けるといふ事を附加へた。

「それは不思議だね。」彼は考へ深さうに答へるのです。「マーゴヴァンはこの事務所で、私がよく知つて居り、そして好んでもゐる唯一人の人なんだ。今朝あの人やつて來て、いつものやうな挨拶を交はした時、私は不思議な衝動に驅られてこんな事を言つた。『御免下さい、マーゴヴァンさん。私は貴下の御住所をお訊ねする事を忘れて居りました。』そして所書を買つたのだ。然し何んの爲に斯様事をしなければならなかつたのか、今まで少しも分らなかつたのだよ。貴下の出喋張の結果は、貴方に負はずべきであらうけれども、然し貴下さへいゝならこの晚餐は私自身で食べる事にする。」

彼は同じ處で度々晚餐を食べました。——彼にとつては食べ過ぎたやうでもありません。と言つて御馳走の内容を毀けるつもりはありません。といふのは彼はマーゴヴァン嬢と戀に陥ち、結婚を申込んだのですが無残にもそれは受入れられたのです。

數週間の後私はこの婚約の報らせを受けました。そして當然私も若い令嬢やその一家と識合ひになつたわけですが、その前に、ある日の事、私はカーネイ街で美貌の、しかし何處か遊蕩兒らしい容貌の青年に會ひました。そして私は何等の理由もなしに、彼を尾行し監視したい慾望に驅られたのです。彼はギャリイ街へ曲つてユニオンの廣場まで出ました。其處で時計を眺め、それから廣場へ入つて行きました。そして誰かを待つてゐるらしく、暫く道路を彼方此方と歩廻つて居りました。すると間もなく流行服を身に纏つた若い美人がやつて來て、彼と一緒にになりましたが、二人は連れだつてストックトン街の方へ歩き出したのです。私は尾行を續けましたが、その時私は非常な要心の必要を感じたのです。といふのは、その少女は私にとつては全く未知の女でしたけれど、彼女は一眼で私を認めさうな氣がしたからです。彼は五六度街から街へと曲りましたが、到頭、ある家の前まで來ると、二人とも急がしく邊を見廻しておいて——私は軒下へ隠れる事によつて辛うじてそれから逃れる事が出来たのですが——その家へ入つて行きました。私はその家の地點を語らうとは思ひません。その地點はまだしもその性質よりはましなものでした。

何等明確なる動機もなく、二人の未知の人々に對してスパイの役目を演じた事に就いては私は抗議

を申立てます。私が恥ぢなければならぬか、それとも恥ぢなくてもいいかは、見る人の性格を忖度する事によつて左右される事です。貴下から誘出されたこの物語の最も肝要な部分として、私は此處に何等の躊躇も羞恥もなく書き止めて置きます。

一週間の後私はジョーンに連れられて彼のお金持の義父のもとへ参りましたが、マーゴヴァン嬢を見るに及んで、既に貴下がお察しの通り、然しその時の私が驚いた事には、彼女がああの不名譽な冒險の女主人公である事を認めましたのです。あの不名譽な冒險の輝くばかりに美しい女主人公が彼女であった事は、私にとつては一點の疑ひもありません。然しその事實は次ぎのやうな重大性を持つてゐるに止まるのです。彼女のあまりの美しさは、私がかつて見た婦人と同一人である事に對して疑ひを抱かせた程私を驚かせました。彼女の容貌のこの素晴らしい魅力が、どうしてあの時私に氣がつかなくなつたのでせう。然し、いえ、——其處には間違ひの餘地はありません。その相違は衣服と周圍の事情に依つてあるのです。

ジョーンと私とは一宵をその家で過しました。私たちの相似に對して、長い経験から來た我々の忍耐のおかげで、漸く堪へる事の出来るあのデリケートな擲揄を忍びながら、間もなく若い令嬢と私とが二人きりで數分間取残された時の事、私は彼女の顔を正視しながら、突然重々しい口調で話しかけた。

「マーゴヴァン嬢、貴女も雙生兒をお持ちですね。前の火曜日の午後、私はユニオン廣場で見か

けましたよ。」

彼女は暫らく大きな灰色の眼をきつと私の方に向けました。然しその眼は私自身のよりしつかりとしてゐました。彼女はそれを退くと、靴の爪先に落しました。

「そんなに私に似て居りました？」

私にとつては不自然と思はれない程の冷淡さで彼女はさう訊ねました。

「え、非常なものです。」と私は答へました。「私はすっかりその女に參つて了つて、姿を見失ひたくなかつたものですから、彼女の後を尾けて行つたのです。——マーゴヴァン嬢、おわかりになりますか。」

彼女は蒼白になりました。然し凝つとしてゐました。彼女は再び眼を舉げて私の眼を覗込みました。しかしその顔は些かも動揺してゐませんでした。

「私にどうしろと仰有るのです？」と彼女は言ひました。「貴方はそのお言葉の意味をはつきり仰有る事をお恐れになる必要はありません。何も彼も貴方の仰有る通りです。」

咄嗟の間にも私は考へ直す必要がありました。この女と話をするには普通の方法では駄目なのだ。尋常な脅迫は彼女に對しては全く無駄でありました。

「マーゴヴァン嬢」と私は言ひました。然しその聲音に私の胸の中にある或る感情が表はれるのをどつする事も出来ませんでした。「貴方が恐い脅迫の犠牲になつてゐられるのだと考へないでゐる

事は不可能です。貴女に又しても、災難を負はせるぐらゐなら、私は貴方の自由を取戻す爲めに一肘の力をお借ししたいと思ひます。」

彼女は悲しげに、そして絶望的に頭を振りました。私は吃りながら更に言葉を續けたのです。「貴女の美しさは私の怒りを鎮めました。貴女の正直さと災難は私の武器を刳取つて了ひました。貴方が良心にもとづいて自由に行動する事を許るされて被居るなら、貴女は必ず御自分で一番正しいとお思ひになる事をなさるでせう。若しさうでなかつたら——よろしい、神様は私たちを救つて下さい。貴女は結婚に對する反對の他、私を恐れる事は何もありません。この反對とても、他の見地からすれば、私とても認める事が出来るかも知れないのです。」

これは私の言つた言葉の通りではありませんが、かうした意味の事でした。私の突然な、そして惑亂せる感情は私の言ふがまゝに任せました。私はつと立上ると、最早再び彼女を見ようと思ひないで、その時這入つて來た他の人々を迎へたのです。私は出来るだけ靜かに言ひました。「私は今マーゴロヴァン嬢に左様ならを言つたところです。思つてゐたより晚いやうですね。」

ジョーンも私と一緒に街へ出ると彼はジュリア嬢に何か變つたところがあつたのかと訊ねました。「病氣だらうと思ふよ。」と私は答へました。「だから辭する事にしたのだ。」

それ以上の事は何も言ひませんでした。

その翌夜は夜更けてから私は自分の借間へやつて來ました。昨夜の出來事は私の神経を苛立たせ、私の體の具合が悪くしました。私はそれを治さうと思ひ外氣の中を散歩して頭の中を清淨にしようと思ひましたが、何かしら兇事の恐しい豫感がひしくと身に迫つて來るのです。——譯のわからない捕捉しがたい豫感でした。それは肌を刺すやうな霧深い晩で、私の着物と言はず髪毛と言はず、びつしよりと濡れそぼれて、寒さのために私は身慄ひをしてゐました。部屋へ入ると室内着を引つ

かけ、スリッパをはいて赤々と燃えさがる石炭の前に腰を下ろしましたが、それでも心持ちの悪さは一層募るのみでした。私は最早や怯えてゐるのではなく震へてゐるのです。何かしら差迫つて來る危機の恐怖は、それ程強く、胸の毀れる思ひでしたので、これを追拂ふために私はわざと眞實の悲哀を喚起す事に努めました。——未來に胚胎してゐる恐怖を驅逐するために、痛々しい過去の記憶を

それに取つて變らせようと努めたのです。私は兩親の死を回想し、彼等や、彼等の墓の側にあつての最後の悲しい情景に私の心をしつかりと結びつけようと思ひました。然し何しろそれは數年前の出來事でしたから、それ等は總てうつつすらとしてゐて實際の事ではないやうに思へるのです。突然私は、張り

りきつた絲が鋼鐵の一撃でばらくにされるやうに、私の思索の中をすつと一突き引離すやうな——それ以外の比較を見出す事が出來ようとは思はれませんが——鋭い叫びを、人間の苦悶の絶頂にある叫びを耳にしました。私は窓の側に跳びつくとそれをさつと開け放ちました。眞正面にある街燈が光を濡れそぼれた舗道と建物の前に投げかけてゐます。襟を立てた一人の警官が門

の處で靜かに葉巻を燻らしてゐました。その他には何人の影も見えませぬ。私は窓を閉ぢ、覆を下ろすと、火の前に腰をおろし、自分の周圍に向つて心を向けようと致しました。私の最も慣れた行爲を行ふ事によつてそれを救はうとする爲に、私は時計を眺めました。恰度十一時半を指してゐます。その時、私は再び恐しい叫びを耳にしたのです。それは部屋の中——私の直ぐ側に起つたやうな氣がしました。私はすつかり脅かされ、暫くは何をする勇氣もありませんでした。數分の後——私はその間にどれ位の時間が介在してゐたか思ひ出す事が出来ません——ふと氣がつくと私は出来る限りの速力を出して馴染みのない街を疾走してゐるのでした。私は何處にあるのやら、何處へ行かうとするのやら分りませんでした。然し間もなく私は二三臺の馬車が表についてゐる、そして中には灯が彼方此方と動き、喧燥を極めた聲が洩れて來る邸宅の階段を跳上つて行きました。それはマーゴーヴァン氏の邸宅だつたのです。

私のよき友達よ、貴下は其處で起つた出來事を御存知であります。一つの部屋の中にはジュリア・マーゴーヴァンが毒を呷つて數時間前から死んで居りました。そして他の部屋では彼自身の手によつて加へられた短銃の胸の彈傷から溢出る血汐に塗れながら、ジョン・ステイヴンスが仆れてゐました。私が部屋の中へ躍込み、醫師を傍へ押しつけて、彼の額に手を置いた時、私は眼を見開いて、ぼんやりと嘖めてゐましたが、直ぐそれを閉ぢると溜息もつかずに死んで了ひました。それから六ヶ月の後、貴下の美しいお邸で、貴下の聖らかな奥さんの介抱によつて、漸く生命を恢復した時まで、私

は何事も知りはしなかつたのです。これ等の事は貴方も既に御存知の事です。然しこれからお話ししようとする出來事は、未だ貴下も御存知ではありませんまいと思ひます。

數年後の事です、ある月の明るい夜の事私はユニオン廣場を通りかゝりました。時刻が遅かつたので、廣場の中には誰も居りませんでした。かつて私があの運命的な逢曳きを目撃した地點までやつて來た時、過去のある記憶が自然私の心の中に魅つて參りました。私は我々を驅つて、一番悲惨な性格に思ひを凝らさしむるあの不可解な片意地を以つて、腰掛に腰を下ろすとぐつたりとそれによりかかりました。その時一人の男が廣場へ這入つて來たと思ふと私の方へ向つて歩いて參りました。彼の手は背後に組合はされ、彼の頭はうなだれてゐました。彼は何ものをも注意しないやうに見えます。私が坐つてゐる處へ彼の影が近附いて來た時、私は數年以前、同じ場所でジュリア・マーゴーヴァンと逢曳きしてゐた男がこの男である事を認めたのです。然し彼の様子は恐しく變つてゐました。煤けた、疲れきつて、よろ／＼としてゐました。遊蕩と惡徳があらゆる相好の中にまぎ／＼と見え、衰弱がはつきりと外部に表はれてゐます。着物は崩れ、髪の毛は額に亂れかゝり、一見して奇怪で、そして繪のやうでした。この男にとつては自由よりは監禁——それも病院への監禁の方が何よりも應はしいやうに思へるのです。私ははつきりとした目的もなしに立上ると彼の前に立ち塞がりました。彼は頭に手を擧げ、私の顔をまじ／＼と見守つてゐましたが、その時彼の上にかぶさつて來たあの恐しい變化を述べる事は何人にも出來ないでせう。それは言ふべからざる恐怖の容貌でした。——彼は幽靈

と眼と眼をつき合はせてゐると思つたのです。然し彼は大膽な男でした。

「貴様、ジョン・ステイヴンス！」

彼はさう叫ぶと、慄へてゐる手を振上げ、拳を固めて力なく私の顔に打下ろしましたが、そのまゝ、砂の上に打倒れました。私はそれを見て立ち去つたのです。

誰か、彼が其處で石のやうに死んでゐるのを發見しました。それ以上の事は何事も知られては居りません、名前さへも。この男の事を知らうと思へば、死んでゐるといふ事だけで充分でありませう。

—終—

ビヤース集終

砂 男

ナタナエルから

ロタールへの手紙

随分長い長い間手紙を書かなかつたので、君達は屹度心配してゐるだらう。お母さんは怒つてゐられるかも知れない。そしてクララも僕がこつちで自墮落な生活に没頭して、僕の可愛い天使の姿を全く忘れて了つたのではないかと危ぶんでゐるに違ひない。——だが、決してそんなのではないのだ。毎日毎時僕は君達皆のことを思ひ出してゐる。甘い夢の中では優しいクララの親切な姿がいつも僕の前を通りいつもの明るい目で僕に微笑みかけるのだ。

けれど、どうして僕は君達に書くことが出来よう。僕の精神は全く分裂して、何も考へることさへ出来ないのだ。僕の生活に何か知らぬ恐ろしいものが這入り込んで来た。僕を脅かす運命の暗い豫感が黒雲のやうに僕の上に覆ひかぶさつて、どんなに明るい日光をも遮つて了ふ。

こゝで僕は君にこの事件について語らなければならぬのだが、それは、考へて見ると殆ど滑稽に近しい事件なのだ。

僕の心からの友ロタールよ！ 僕はどう書き出したら、數日前僕に起つた事件が僕の一生を破壊す

るに違ひないことを、君に少しでも感じさせることが出来るだらうか。君がもしこゝに僕と一緒にゐるのだつたら、君は——いや併し、手短かに言つて了はう。

僕の身に振りかゝつた恐ろしいこと、いふのは數日前、つまり十月三十日の正午十二時に一人の晴雨計賣りが僕の室に入つて来て、品物を賣り付けようとしたのだ。僕は何も買はずに、その男を叩き出して了つたが——。

君は屹度豫想してゐるだらう。この事件を僕がこんなに重大視するのには、僕自身の過去の生活に根本的な關係があるのだ。それでなければその行商人が僕にそんな敵意を抱かせる筈がないわけだ。僕は今全身の力と落着きとを集めて、出来るだけ秩序を立て、僕の少年時代の經驗を話さうと思ふ。さうしたら、君の敏感な魂はすべてを明白に見知つて了ふことが出来るだらう。

僕達、といふのは僕の弟妹達は子供の時分晝食の時以外には父親と餘り會ふことがなかつた。父は非常に多忙だつたに相違ない。併し、夕食が済むと僕達は皆母と一緒に、昔からの習慣に従つて父の書齋へ集り、そこで丸い卓を圍んで坐つた。父は煙草を喫つて、大きなコップでビールを飲んだ。父はよく僕達に色々な不思議な物語りをきかせて呉れたが、よくその話中に夢中になつて、パイプの火を消して了つた。そしてそのパイプに紙を燃してあてがつてまた點火するのがその時分の僕には實に面白かつたものだ。けれど、時には父は僕達に繪本を渡して、自分は黙り込んで身動きもせず安樂椅子に腰かけて濛々と煙の雲を吐いてゐることもあつた。僕達はまるで霧の中を泳いでゐるやうだ。

つた。斯ういふ風な晩、母はいつも悲しんでゐるらしかつた。そして、九時を打つか打たないかに言ひ出した。

「さあ、子供達！ もう御寢み！ 砂男が来るよ。」

さういふ時いつも僕は本當に重いゆつくりした足どりが階段を上つて来るのを耳にした。それが屹度砂男なのに違ひない。僕はある時、書齋を出ながら母に訊ねたことがある。

「ねえ、母さん、いつも父さんの所から僕達を追ひ出す悪い砂男つて一體誰なの。どんな顔をしてゐるの。」

「砂男なんて居やしないのだよ。坊や。わたしがお前に、砂男が来るよ、といふのは、たゞ、お前がもう睡くて目を開けてゐられない、恰度誰かお前の目に砂を撒いてゐるやうだ、といふ意味なのですよ。」

併し、母の答は僕を満足させなかつた。僕の子供らしい心の中には、母が砂男を否定するのは唯僕達に恐怖を起させないためだといふ明白な考へが生じて来た。何しろ僕はいつも階段を登つて来る蹙音を耳にしてゐたのだから。そこで僕はある時、一番下の妹の世話をしてゐる乳母にそつと訊ねたものだ。乳母の答へはかうだつた。

「はい、ナタナエル様、まだ御存知ありませんのかね。砂男といふのはね、恐ろしい奴で、早く寢床に就かない子供衆の所へやつて來ましてね、大きな手の平一杯の砂を目の中に投げ込みますのですよ。」

すると目は血だらけになつて顔から飛び出してしまふ。そこでそれを袋に入れて、三日月様の中へ運んで、子供に食べさせるので御座いますよ。」

僕はそれの残忍な砂男の姿をまぎ／＼と心の中で描いて、怖れと愕きとで慄へながら、一晚中寢室で苦しんだ。

勿論その中に僕は段々成長して来て、三日月の中に子供の巢を作るといふ砂男に就いての乳母の話は全く出鱈目であることを理解するやうにはなつた。それでも矢張り僕にとっては砂男といふ恐ろしい幽霊が存在した。殊に彼が階段をいつも上つて来て、しかも父の書齋に入つて行く蹻音を耳にする時は身體中に戦慄が走つて行つた。尤も彼の訪問が暫らく杜絶することもあつたが、その後には以前にもまして繁々と續いた。彼と父との交遊は斷間なく僕の心を悩ました。その後には以前にこのことについて父に直接質問して来る勇氣は持てなかつたのだ。そしていつか屹度この自分の目で砂男の正體を見とどけてやらうと堅く決心した。その時分から既に僕の中に巢喰つてゐた冒險癖や獵奇趣味は僕をかりたて、小鬼や魔女や小人やの物語を耽讀させたけれども、この砂男はいつもそれ等のすべての上に立つてゐた。

僕は十歳になつた。そして母は僕を今までの子供部屋から出して、小さいながらも自分の部屋にさせて呉れた。その部屋は二階の廊下に沿つてゐて、父の書齋から餘り隔つてはゐない。今でも僕達は相變らず九時になつて、不思議な訪客の蹻音が聞え出すと、それ／＼自分の部屋へ引取らされてゐるのだ。けれども、僕は自分の部屋の中に耳をすませば、彼が父の室へ入つて行く蹻音をはずき／＼と聞き分けることが出来る。そして、その瞬間から異様な臭氣を持つた煙が家中を充たすやうにさへ思はれるのだ。

僕は度々、もう母が引取つて了つてから、一人でこつそりと廊下に出て聴き耳を立てたが、砂男はいつもピツタリと扉を閉めてゐるので、その姿を見ることは愚か、室内の物音さへ聴き取れたことはない。最後に僕はもう抵抗し切れない欲望にかられて、自分で父の室に潜んで、砂男の來るのを待つ決心をした。

父の沈黙と母の悲しげな様子で、ある晩僕は砂男の來ることを豫感した。僕はまだ九時前に父の書齋を出て、扉のすぐ傍の物陰にかくれてゐた。玄關の扉が軋み、重い緩りした足音が床を踏んで階段へ近寄り、母は子供達を連れて急いで僕の前を通り過ぎて行つた。靜かに、實に靜かに父の室の扉を僕は開けた。父は例の通り扉に背を向けてちつと黙り込んでゐた。僕はす早く扉のすぐ傍に立つてゐる衣裳戸棚の背後に身をかくした。蹻音はいよ／＼間近く迫つて来る。扉の外で奇妙な唸り聲がきこえる。

僕の心臓は心配と期待とでひどく震へた。足音は扉の前でピツタリと止つた。把手が烈しく廻され、扉はすさまじい音を立て、開いた。

僕は全身の落着きを集めて注意深くその方を覗いた。

砂男が室の中央に、父と向き合つて立つてゐる。灯の光が彼の顔にまともに當つてゐる。砂男！
 その怖ろしい砂男といふのは、家でよく晝食を共にする、老人の辯護士のコッペリウスだつた。
 併しこの時のコッペリウス程嫌はしい姿はまづ他にない。――首の不均合に太い、肩幅の馬鹿に廣
 い、大男を想像して見給へ。まるで叢のやうに生え揃つた灰色の睫毛。その奥にある一對の猫の
 眼。大きな上唇までたれ下つた太い鼻。歪んだ口はいつも悪魔の笑ひを洩らしてゐて、頬には暗紅
 色の斑點が一杯で、齒の間からは絶えずシューーくと音を立て、息が洩れてゐる。要するに彼の全身
 が不快で兇惡であつたのだ。そして殊に僕達子供にとつて恐しかつたのは彼の節くれ立つた毛むくぢ
 やらな拳であつた。僕達は彼の手で觸れたものはもうどうしても觸れることが出来なかつた。彼自身
 もそれに氣附いて、母が親切に僕達に分けて呉れた菓子や果物に、何等かの口實を設けては、觸つて
 見るのを楽しみにしてゐた。僕達はもう目に一杯涙をためて、彼が觸りさへしなければ美味かつたに
 違ない菓子や、うらめしく見つめるより他に仕方がなかつた。
 母もコッペリウスを嫌つてゐるに相違なかつた。彼がやつて來ると、それまでどんなに悦ばしい上
 機嫌であつても、母は屹度沈み込んで悲しむやうに見えたから。
 父だけが彼を妄信して、彼の不法法を天才的な人間に付き物だとして許してゐたばかりでなく、出
 來る限りのことをして彼の御機嫌を取つてゐた。彼が何か一寸した暗示を與へれば、高價な料理と珍
 らしい酒が立所にと、のへられた。

そのコッペリウスを今限の前に見た時、何か恐しい冷たさが僕の魂の中を通り抜けた。僕はそし
 て砂男が彼以外の誰でもないのだといふ事を固く信じて疑はなかつた。僕はまるで魔術に縛られたや
 うになり、見付かつて罰を喰ふのが怖さに息を凝らして、戸棚の背後から首だけ出して立つてゐた。
 父はコッペリウスを仰々しく出迎へた。コッペリウスは、

「さあ、仕事だ！」

と、腫れた鼻で嚴かに叫び、上衣を脱ぎ棄てた。すると、父も静かな暗い顔付で寢室用ガウンを
 授げ、二人とも長い黒いどてらを身につけた。それから父は室の隅の戸棚の扉を開けたが、今まで唯
 の戸棚とのみ思つてゐたその奥は暗い穴蔵になつてゐて、そこには小さな爐さへ据ゑ付けてあつた。
 コッペリウスがそこに近付くと、その爐から青い焰がメラ／＼と上つた。その邊にはあらゆる種類の
 奇妙な器具が立つてゐた。お、神様、その焰に向つて腰を屈めた時、年老つた父の顔がどんなに變つ
 て見えたことであらう。彼は悪魔のやうに、コッペリウスに似てさへ見えたのだ。コッペリウスは灼熱
 した火箸を振つて、ドロ／＼した火焰の中から明るく輝いてゐる物質をとり出して、それを一心にな
 つて穂を打ち始めた。僕はその時に、その邊に人間の顔が見えるやうな氣がした。しかもそれには全
 く眼といふものがなくて、その代りには唯暗い二つの穴だけがあるのだ。

「眼球を寄越せ。眼球を寄越せ！」

と、コッペリウスは鈍い、よく響く聲で怒鳴つた。僕はもう前後も分らない恐怖に驅られて、大聲

で泣きながら、隠れ場所から床の上に倒れて了つた。コツペリウスはすると僕を引き摺へて齒を喰ひしぱりながら、

「小さな獣め！ この小さな……」

と、僕を爐の上に投げた。僕の髪の毛は焦げ始めた。

「さあ、眼球が見付かつた。子供の眼球が二つ見付かつた。」

かう吠きながらコツペリウスは、手掴みで焰の中から灼け切つた粒を掴み出して、僕の眼の中に撒き散らさうとするのだ。その時漸く、僕の父が両手を上げて懇願した。

「先生、先生！ 私のナタナエルの眼は許してやつて下さい。」

僕のまはりですべてが暗く黒くなつた。そして僕の神経と四肢とを刺すやうな痙攣が過ぎた——僕はもう何も知覺しなかつた。

優しい温かい息吹が顔の上を滑つて行つたので、死の眠りから目覺めた。母が僕の上に屈んでゐたのだつた。

「まだ、あの砂男はあるの？」

僕はやつとこれだけを訊いた。

「い、え、坊や、もう、夙うの、夙うの昔に行つてしまつたのだよ。もう誰もお前に悪いことはしないよ。」

さうして母は蘇生した愛兒を心から接吻して胸に押しあてた。

僕の心からの友ロタールよ。

僕は何のためにこれ以上君を退屈させ、勞らせる必要があらう。もう澤山ではないか。

僕は君に唯僕の少年時代の最も恐ろしい瞬間に就いて語れば充分なのだ。さうすれば、恐らく君は理解して呉れることだらう。僕にとつてこの世のすべてがまるで色褪せたものであらうとも、それはあながち僕の眼の弱さからではなく、暗い宿命が僕の一生に濁つた影を落してゐるからなのだ、といふことを——。

コツペリウスはもう姿を見せなかつた。彼は町を立去つたといふ人の噂だつた。

それから一年許し過ぎてゐたらう。僕達は皆、昔のまゝの習慣に従つて、晚餐の後例の丸い卓子に坐つてゐた。父はひどくはしやいで、若い時分にした旅行談から道化した物語をいくつもして聞かせて呉れた。その時、九時が鳴つた途端に、玄關の扉の蝶番が軋つて、緩りした、重い、鐵のやうな聲音が控の間から階段を上つて來た。母は蒼くなつて吠いた。

「コツペリウス！」

「コツペリウス！」

と、父は血の氣のない破れた聲で繰返した。

母の眼からは涙が流れた。

「マですけれど、御父さん、本當にどうにかならないのですか。」
「もうこれで最後だ、今日で最後だ。それは約束しても宜い。さあ、もうお行き、子供達を連れてお行き、——ぢやあ、皆御寝み！」

僕は冷たい石の間にはさまれたやうな気がした。母は僕の腕をとつて言った。
「おいで、ナタナエル、おいで！」

僕は言はれたまゝに床に入つたが、不安で目を閉ぢることさへ出来なかつた。いやらしいコッペリウスが僕の前に立つて、眼に火花を散らせて、無氣味に笑ふ。その姿がどうしても眼前を去らないのだ。

恰度眞夜中と覺しい頃、大砲を發射したかのやうなずさまじい物音が起つた。家中全體が震動した。僕の扉の前を人のざわめく氣配がした、女關の扉までがギー／＼言つて、開閉された。
「コッペリウス！」

僕はさう思つて、飛び起きた。その時、何とも言へない悲しさのこもつた、何かを裂くやうな叫び聲が聞えて來た。僕は父の室へ駆け込んだ。扉は開け放したまゝになつて居り、窒息させるやうな煙が僕に向つて渦巻いて來た。下女が泣いてゐた。

「あゝ、旦那様が、旦那様が！」
煙を濺々と吐いてゐる爐の前に、黒く焦げて歪んだ顔で、父が横になつてゐる。そのまはりには兄弟

達が泣きじやくつてゐて、母はもう失神してその間に倒れてゐた。

「コッペリウス奴！ 呪はれた悪魔め、貴様が父を殺したのだ。」

二日経つて棺の中へをさめた時、父の顔は漸く柔和に、生きてゐる時と同じ相好になつた。悪魔のコッペリウスとの交はりも父を決して永遠の破滅に陥れることが出来なかつた。さう思つて僕は安心した。

心からの友よ。

僕が今君に、あの晴雨計賣りがコッペリウスの畜生だと言つたならば、其不快な姿が僕に重大な不吉の暗示を與へた事を、君は不思議とは思はない事だらう。勿論彼の衣服は變つてゐた。が、コッペリウスの顔や姿は、忘れたり間違つたりするには、餘りに深く僕の心に刻み付けられてゐるのだ。其上に彼は名前さへも舊の儘だ。彼の話は彼女にはもつと落着いた氣持の時に書く。ではさよなら。

クララから

ナタナエルへの手紙。

随分御手紙を下さりませんのね。でも私、あなたが私をいつも心の中中で想つていらつしやることを信じて居ります。何故つて、兄のロタールへ宛てた最近の御手紙の表書を私の名前に書き違へたりなさる位なのですもの。

私本當に嬉しく封を破りました。「あゝ、心からの友ロタールよ！」といふ言葉で、初めて間違ひを覺りました。私、もうそこで讀むのを止めて、手紙を兄に渡して了へば宜しかつたのでせう。それなのに、私はさうは致しませんでしたの、あなたの書き出しが私を大へんに感動させて了ひました。私はもう息も出来ません、眼の前がピカ／＼光つたりしたのです。

あゝ、私の心から愛してゐるナタナエル！

どうしてそんな恐ろしいことがあなたの生涯に起つて來たのでせう。私は讀みました。讀みつけました。私は初めて、あなたのやさしい御父様がそんなに怖ろしい死に方をなさいましたことを知りました。兄のロタールは私を慰めて呉れました。でも、晴雨計賣りのジューズペ・コッポラが私を一歩一歩追跡して來て、その日は夢の中にまで這入り込んで來たりしました。併し、どうぞ御安心して下さい。今ではもうすつかり元氣でもとの通りに快活ですから。

そして、私、率直に申し上げて了へば、あなたのお話しになつた恐ろしい不思議な事件は屹度たゞあなたの心の中でだけ起つたので、實際にあつたこととはあまり關係がないのだと、さう思つて居ります。そのコッペリウス老人は全く嫌らしい人だつたのでせう。けれど、その人が子供を憎んであつたために、子供のあなたに心からの嫌惡を感じさせたといふだけだつたのではありませんでせうか。そして、あなたのお父さんと一緒に夜更けてなさる御仕事といふのは、唯二人で錬金術の實驗をやつていらつしやつたのでは。勿論御母さんはそんなことで無駄な御金を使ふことを満足にお思ひになる筈は

ありません。お父さんがお亡くなりになつたのは、御自身の不注意からだつたので、コッペリウスは多分罪はないのです。

あなたはあなたのクララにお怒りになるかも知れませんね。「こんなに冷たい人間には、我々を屢々見えざる腕で抱くあの神祕の光りは啓示されない。彼等はこの世の表面の美しさのみに心を奪はれ、金色の果實の内を殺す毒の潜んであるのを知らないのだ。」と仰有るでせう。

けれど、私、あなたにお願ひせずには居られないのです。どうぞ、辯護士のコッペリウスや、晴雨計賣りのコッポラのことなどは忘れて下さい。こんな怪しげな人達があなたに何を仕かけることも出來ないのだといふことを確信してあて下さい。彼等の兇惡な力に對するあなたの信仰が、彼等をあなたの大敵に仕立てあげて了ふのです。明るく快活におなりなさい。私はあなたの守り神になつて上げます。私はコッポラの拳などを少しも恐れは致しません。彼は辯護士として私のお菓子を臺無しにすることも、砂男として私の眼を潰して了ふことも出来はしないのです。永久に私の戀人であるナタナエル様。

ナタナエルから

ロタールへの手紙。

この前の君に宛てた手紙を、勿論もとは言へば僕の迂濶から出たことだが、クララに見られたこ

とは大變に困る。彼女は僕にひどく哲學的な手紙を寄越して、コツペリウスもコツボラも要するに僕の精神の中にだけ存在してゐるので、いはゞ僕の自我の幽靈だと證明した。實際彼女のやうに子供らしい眼付をした女がそんなに理智的な議論を吐くのは不思議だ。

だが、それはどうでも宜い。それに例の晴雨計賣りのジューゼツベ・コツボラが斷然昔の辯護士コツペリウスではあり得ないことが判つたのだ。

僕は最近伊太利から來た物理學の教授でスبرانツァーニといふ人の講義に出席してゐる。教授はもう數年前からコツボラとは知己で、これにコツボラの言葉の訛りから判斷しても、生粹ピエモンテ人に違ひない。コツペリウスはどうも猶太系らしいが、とに角獨逸人だつた。

それにも係らず僕はまだ全く安心してはゐないらしい。君のクララがどんなに僕を陰氣な夢想家扱ひにしやうと、コツペリウスの顔が僕に與へた不快な印象をどうしても忘れることが出来ない。

スبرانツァーニ教授は不思議な爺さんだ。小柄な丸々とした男で、頬骨が突出して、細い鼻をして、唇がまくれ上つて、——だが、こんな文句を讀むより君は伯林の懷中曆の中にあるカリオストロの顔を思ひ出せば宜い。スبرانツァーニはあれにそっくりなのだ。

この間僕が彼の家を訪れた時、ふとした拍子にある硝子の屏を透して見た。すると、向うの窓に脊丈の高い、さらりとして、立派に衣裳をつけた女が小さな卓の前に坐つてゐた。彼女は扉に向つて坐つてゐたので、僕は彼女の天使のやうに美しい、顔を隅なく觀察した。彼女は僕に氣附かないらし

かつた。その上彼女の目が何だか硬い感じがして、言つて見れば視力を持つてゐないやうだつた。彼女は眼を開いたまゝ寢てゐるといふ風なのだ。僕は氣味が悪くなつて、すぐに隣の講堂へ逃げ込んだ。これは後になつて聞き知つたことだが、その時の女といふのは、スبرانツァーニの娘のオリンピアで、何故か判らないが嚴重に監禁されてゐて、何人をも傍へ近付かせないのだ。噂によると彼女は白痴で、その上、——併し、君に今こんなことを書く必要がない。すべて直接會つて話しをするに越したことはない。といふのは、僕は二週間程したらば君達の所へ歸つて行くのだ。僕は甘美な天使のやうなクララの姿を再び見なければならぬ。だから今日も彼女には書かないことにする。

千度の挨拶。

私の憐れな友人、若い學生のナタナエルに起つた事件よりも奇怪で驚く可きものは空想することさへ出來ない。といつて勿論、誰も私に若いナタナエルの物語について訊ねたわけではないが、讀者も既に御承知の通りに、私は小説家といふ不思議な人種に屬してゐて、かういふ異常な事件が発生したとなると、黙つてはゐられない。何物か力強く私を引摺つて、ナタナエルの宿命的な一生に就いて口を開かせるのである。そして、その不可解な珍奇な祕密が今私の魂全體を充たしてゐる。

先づ必要な豫備知識として、今までの三つの手紙に附け加へて語る可きことがある。

ナタナエルの父が死んでから間もなく、ナタナエルの母は、遠い親戚の孤兒であるクララとロター

ルを家に引取つて世話をすることにした。クララとナタナエルとは間もなく熱烈に愛し合ふやうになり、ナタナエルが學業を續ける爲にゲーの町へ出發する時には二人は公然と約婚の間柄であつた。そして、今彼は、彼の最後の手紙にあつたやうに物理學教授スベラントアーニの講座に出席してゐる。ナタナエルが彼の友ロタールに、晴雨計賣りのコッポラの不快な姿が彼の生活に大敵として現れて来た、と書いたのは全く正しかつた。その日から、その瞬間からといふもの、彼の性質はがらりと打つて變つて了つた。彼は陰鬱な夢想に耽り始め、遂には人生そのものさへも彼にとつては夢であり妄想であるやうになつた。彼はいつも、人間は自分では自由を信じながらある見えない力に残酷に支配されてゐることを口にし、人間が如何に抵抗を續けようと結局は宿命の定めた儘に安住しなければならぬと説いた。

元來が理性的なクララはナタナエルのこの神祕的な信仰に全然反對であつた。その話題に觸れる度にクララは言つた。

「え、ナタナエル。あなたの仰有る通りだわ。コッペリウスは屹度惡魔的な力を持つてゐて、この世であなたに何か恐しい仕業をすることが出来るでせう。そして、あなたがそれを信じてゐる間は彼の力は衰へないでせう。つまり、あなたの信仰がコッペリウスの力なのですわ。」

ナタナエルは、クララが惡魔の存在を唯人間の内界にのみ認めようとするのに腹を立て、惡魔や魔法の力に就いての神祕な教を説明し始める。するとクララは何か別のことを話し出して交ぜ返すので、益々ナタナエルを怒らせて了ふのである。

クララの冷靜な散文的な性情に對するナタナエルの不滿は段々と昂じて行き、クララはまたナタナエルの暗い退屈な神祕に對する嫌惡の情を征服することが出来ない。かうして二人は知らず識らずの間に段々と氣持が遠ざかつて行つた。

その中にナタナエルは、コッペリウスが二人の愛の幸福を滅すに相違ないといふ、不吉な豫感を題材として詩を作つて見ようと思ひ込んだ。彼は先づ、自分とクララとが眞實の愛に結ばれてゐる様を描き、またこの二人の生活に干渉して来た彼等の幸福を跡方もなく粉碎して了ひさうな一つの黒い拳について書いた。そして、愈々彼等が晴れの結婚式の聖壇の前に立つた時に、恐る可きコッペリウスが現はれて来て、クララの優しい眼に手を觸れるのである。その眼はその拳に着いて飛び出して、まるで血に塗れた火花のやうに燃え熾りながら、ナタナエルの胸に入つた。それからコッペリウスはナタナエルを捉へて素晴らしく大きな火焰の環中に投げ込んだ。その火焰の環は暴風のやうな速度を以て廻轉し、唸り咆えながら總てをその中に捲き込むかのやうである。その騷擾は恰度火の神オルガンが憤怒して泡立つ激浪に向つて鞭打つて、浪がまた白い頭を持った眞黒な巨人のやうに天に向つて逆卷いてゐるのに似てゐる。併しこの騷擾と混亂の中からナタナエルはクララの聲を聞き分けることが出来る。――「ナタナエル！ あなたは私が見えないのですか。コッペリウスはあなたを欺したのですよ。あなたの胸の中で燃えてゐるのは私の眼ではありません。それはあなた自身の心臓の血の一

滴なのですよ。私にはまだ眼がついてゐます。ほら、御覽なさい——ナタナエルは思ふ。あゝ、あれはクララだ。そして俺は永久にもう彼女のものだ。ナタナエルはクララの眼の中を見る。だが、その時、クララの眼と共に彼に笑ひかけてゐたのは死であつた。

この詩を作つてゐる間ナタナエルはすっかり落着いて健全であつた。けれども、愈々完成して、自身で聲高く朗讀して見た時、名狀し難い恐怖が身内を襲つた。

「誰の聲だ、この恐い聲は。」

彼等二人、ナタナエルとクララは母の家の小庭に坐つてゐた。クララは非常に上機嫌であつた。例の詩作に没頭してゐる間ナタナエルがいつもの夢や豫感で彼女を苦しめなかつたからである。ナタナエルも生き／＼として、また何事もなかつた昔のやうに明るい物事について話してゐた。クララは言つた。

「さあもうこれであなたをすっかり取り戻して了つたのね。御覽なさい。憎らしいコッペリウスなどは何處かへ追つ拂つて了つたぢやありませんか。」

この時初めて、ナタナエルの頭に浮んだのが、ポケットの中の詩である。彼は直ぐに原稿を取り出して讀み始めた。クララはまたいつもの退屈を豫想して、併し諦めて、おとなしく編物の針を動かした。詩の中の暗い雲が漸く厚く濃くなるに従つて、彼女はその靴下を手から落して、ナタナエルの眼の中を凝然と見つめた。彼は益々興に乗じて進んで行く心の中の火が彼の頬を紅に染め、涙が兩眼か

ら泉のやうに流れた。漸く讀み終つた時、彼は深い疲勞の中に喪心して、クララの手を把り、救ひ難い憂愁の中に溶けて、歎息した。

「あゝ、クララ！ クララ！」

クララは彼をやさしく自分の胸に押しあて、低聲で、併し眞面目にゆつくりと、言ひ出した。

「ナタナエル——私の心からいとしいナタナエル！——そんな馬鹿げた、氣狂ひ染みた作り話は火の中へ捨て、御了ひなさい。」

ナタナエルは愕いて立ち上つた。クララを自分から押し隔てた。

「お前は、生命の通つてゐない、碌でなしの機械人形だ！」

彼は走り去つて了つた。深く傷付けられたクララは苦い涙を注ぐ許しであつた。

「あゝ、あの人は一遍も私を深く愛して呉れたことがなかつたのだ。私を理解してさへ呉れなかつたのだもの。」

彼女は聲を上げて啜り泣いた。

そこへロタールが來た。クララはすべてを打明けなければならなかつた。ロタールは魂の全部を捧げて、妹を愛してゐたので、彼女の訴へた一字一句が彼の胸を火花のやうに灼いた。彼の心の中に以前から培はれてゐた、夢想家のナタナエルに對する不満が、今烈しい憤怒に昇つた。決闘は避け難かつた。二人の男はその翌朝裏庭で出會ひ、大學生の習慣に従つて鋭い劍を以て撃ち合ふことを約束

した。彼等は黙り込んで、暗い顔をして迂路々々して廻り、クララは撃劍の教師が劍を持參して來たのを見た。

翌早朝、決闘場へ到着して、ロタールとナタナエルは矢庭に上衣を脱いだ。血に餓ゑた敵愾心を眼に燃やして、今や互に打ち合はうとした時、クララが庭の小門から轉び入つて來た。息を彈ませながら彼女は叫んだ。

「あなた方はまあ、何といふ亂暴な、恐しい人達なのです！ その前にこの私を突き刺して下さい。戀人に兄様を殺されても、兄様に戀人を殺されても、どうして私がこの上生きて行けませう。」

ロタールは武器を捨て、俯向いて地面を見つめてゐた。が、ナタナエルの心には再び身を裂く許りの憂愁の中にすべての愛情が蘇つて來た。彼の青春の最も樂しかった時期にクララに對して抱いたすべての愛情がそのままに蘇つて來たのである。殺人の道器は彼の手を放れ、彼はクララの前に跪いた。

「僕を許して呉れるかい、クララ！ 僕のクララ！ それから、君も僕を免して呉れるかい、ロタール！」

ロタールは友の深い苦惱に動かされた。三人の和解した人間は止度ない涙の中に抱擁し合ひ、何時の世までも互に別れまいと誓つた。

ナタナエルは、今まで自分を地面に壓し付けてゐた重い荷が下り、今まで自分を脅やかしてゐた暗

の力から救はれたことを感じた。

それから三日の間彼は愛する人々の許に暮して、ゲーの町へと再び出發した。

母にはコツペリウスに關するすべての事は祕し隠されてゐた。彼女もナタナエルと同様に、夫の死をコツペリウスの仕業と信じてゐるのであるから。

ゲーの町へ歸り着くや否や、ナタナエルを此上なく驚かしたのは、彼が住居へ辿り着いて見た時、彼の下宿がすっかり焼け落ちてゐたことである。裸になつた防火壁だけが、灰燼の中から屹立してゐた。一階に住んでゐた藥屋の實驗室から不意に出火したので、その家は下から順々に燃え上つて行つた。それ故、親切で勇敢な友人達が上階にあるナタナエルの室へ飛び込んで、書籍やノートや器具をすつかり運び出すだけの暇はあつたわけである。彼の所持品のすべては全くそのまゝ、左したる損傷さへなく、他の家へ持ち込まれ、そこで既に一室が約定されてさへゐたので、ナタナエルは猶豫なくそこへ移轉することにした。その家が偶然スバランツァーニ教授の住居に向ひ合つてゐたことを彼は別に氣にも留めなかつたし、彼の室の窓から恰度オリンピックの居間が見下せることにも特に不審を挾みはしなかつた。彼はその後殆んど始終、一人で淋しく坐つてゐるオリンピックを、顔の細かい所は勿論見えなかつたけれど、姿だけは判然と見ることが出來た。彼女はよく何時間も全然同じ姿勢で、何の仕事もせず小さな卓の前に坐つてゐて、その眼を凝然とナタナエルの方へ向けてゐることが多

いことにも、彼は氣附いた。彼は彼女よりも美しい均齊を持った女を見たことがないことを自分自身に白状した。併し、彼はクララを胸に秘めてゐる。硬い血の氣のないオリンピックは彼にとつて何の興味をも惹かない。彼は、ほんの時々教科書越しにこの美しい彫刻に目を呉れた。それだけであつた。ナタナエルは其時クララへの手紙を書いてゐる最中であつた。扉を低くノックする音がして、コッポラの不快な顔が室内を覗き込んだ。ナタナエルは骨の底からの戦慄を感じた。併し、スバラントツア—ニ教授が證明した言葉と、クララへの固い約束を思ひ起して、自分の子供らしい幽霊恐怖を恥ぢ、全身の氣力を振つて、出来るだけ平氣な従容とした態度で話しかけた。

「おい君、僕は晴雨計なんか知らないよ。お歸り。」

けれど、コッポラは構はずに、ツカ／＼と室内の内に這入り込んで、醜い笑に口を歪め、しわがれた聲で答へた。

「晴雨計では御座いませぬ。旦那。眼球です。立派な眼球です。」

ナタナエルは愕いた。

「何だ。氣狂め！ どうして貴様は眼球を賣りあるけるのだ。眼球を、どうして——」

が、併しその瞬間に、コッポラは晴雨計を傍の方へ片付け、大きな上衣のポケットに手を突込んで、片眼鏡や雙眼鏡を掴み出し、それを卓子の上に並べた。

「さあ、さあ、眼球だ——眼球は鼻の上だ。——手前の眼球は飛切り上等だ。」

かう口上を述べながら、彼は後から／＼と眼鏡を掴み出した。卓子の上は一面に奇妙な光りを放ち、數千の眼が瘻學的に慄へてナタナエルを凝然と見詰め始めた。それでも彼はその卓子からどうして目をそむけることが出来ずに、コッポラは未だ絶間なく眼鏡を並べて行くので、火焰のやうに燃える眼付が段々と亂雜に入り交つて、その血のやうに赤い視線をナタナエルの胸に注ぐのである。で、彼は狂ほしいまでの恐怖に壓迫されて喚いた。

「止める！ 止める！ 恐しい奴だ。」

コッポラは腹れた憎々しい聲で笑つた。

「お、御入用はありませんのか——では、こゝに上等の遠眼鏡が御座りまするが、如何で。」

コッポラは眼鏡をすつかりと集めてポケットへ藏つて、今度は別のポケットから大小様々の望遠鏡を取り出した。それは一見極めて普通の品で、もう先刻の眼鏡のやうな怪しい節がなかつた。ナタナエルは、そこで、なる可く早くこの取引を了へて終ふために、コッポラから何かを買ひ求めることに決心した。で、その中でも特に念入りに細工の出来てゐる小さな懐中望遠鏡を取り上げて、驗しに窓の外を覗いて見た。この眼鏡程対象を純粹に明瞭に寫し出す望遠鏡を彼は生れて初めて手にしたと思つた。彼は我ともなしにスバラントツア—の室を眺めた、そこにはオリンピックが例の通りに小さい卓子の前に坐つて、腕をその上に置いて、手を組み合せてゐた。

ナタナエルはこの時初めてオリンピックの驚く可き美しさをはつきりと見る事が出来た。唯、どう

したとか、眼だけがひどく硬くて、死んであるのである。併し、不思議なことには、ナタナエルが熟々と見詰めるに従つて彼女の眼に何か火花のやうなものが輝き始める。彼女はこの時初めて視力を得たかのやうに見え、その眼付がいよくと生き／＼して燃えて来る。ナタナエルは魔力に縛られて、いつまでも窓邊に立ち、天使のやうなオリンピアの美しさを観察してゐた。

「コッボラが彼の後から聲をかけた。」

「三ドゥカト頂きます。」

「彼は眼鏡屋のことをすっかり忘れてゐた。」

「ちや、左様なら、コッボラ。」

コッボラは、妙な目付で幾度もナタナエルの方を窺ひながら、室を出て行つた。ナタナエルは、階段の下り口で彼が聲高に笑つたのを聞いた。

彼はまた落着いて、クララへの手紙を續けようと机の前に坐つた。併し、その時、抵抗し難い力がまたしても彼を窓の處へ引き寄せた。彼はコッボラの望遠鏡を掴んで、オリンピアの蠱惑的な姿から眼を放すことが出来なかつた。

それから三日目に、併し、スバランツァーニの窓には窓掛が掛けられて了つた。ナタナエルは全く絶望して、燃えるやうな欲望と憧憬の情に驅られて、町の門を出て彷徨つた。オリンピアの姿はこゝにまでも彼につきまといつて、蒼空に浮び、叢から歩み出し、明るい小川から大きな輝かしい眼で覗

いた。クララは心の中ですつかり色の褪せたものになつて、彼は今はもうオリンピアのこののみを考へるやうになつた。彼は殆んど泣きながら口にさへ出して訴へた。

「あゝ、お前、僕の崇高い愛の星よ。お前はまた忽ち姿を消して僕を希望のない夜で苦しめるために僕の前に現れて来たのか。」

けれども、下宿に歸らうとした時、彼はスバランツァーニの家で唯ならぬ物音のしてゐることに氣附いた。扉はすつかり開け放たれ、人々が各種の調度を運び入れ、第一階の窓はすつかり取り外され、女中達が大きな羽根箒を持つて右往左往してゐるのだ。ナタナエルは全く愕いて往來に立ち盡してゐると、親しい友人のジークムントが近寄つて来て言つた。

「どうだい、スバランツァーニの先生中々話せるぢやないか。」

そこで彼は初めてジークムントから聞いた。スバランツァーニ教授は、大祝賀會と音樂會と舞踏會とを明日催すので、學生の半分は招待されてゐる。その上、皆の噂によると、今まで誰の目にも觸れさせなかつた娘のオリンピアをも初めて人前に出すのである。

ナタナエルは招待状を受け取つた。愈々定め時刻になつて、車が續々と乗り付けられ、廣間に灯が點つた時、彼は教授の家へ赴いた。その日の來客は極めて多數で綺羅びやかであつた。しかも、オリンピアが豪華で趣味のある衣裳をつけて出現した。人は皆彼女の美しい容貌と均齊のとれた肉體とを賞讃しないわけには行かなかつた。少しばかり前屈みの脊と、熊蜂のやうに細い身體は餘りに締つ

たコルセットのためらしかつたし、歩き振りの几帳面過ぎる硬さは晴れの席上での緊張から來るのであつたらう。

音楽會が始まつた。オリンピアは巧みにピアノを弾じ、歌を歌つたが、その聲は非常に明るい玻璃鐘から出る機械的な響きを持つてゐた。ナタナエルは全く魅了されて了つた。彼は最後列に坐つてゐたので、眩しい燭の光のためにオリンピアの顔をはつきりと見る事が出来なかつた。それ故、彼は誰にも氣附かれずにコッポラの望遠鏡を取り出して、オリンピアの方を見た。彼は熱い腕にしつかと握まれたやうになつて、我にもあらず叫び聲を上げた。

「オリンピア！」

居合せたすべての人達が彼の方を振り返り、中には笑ひ出したものも少なくなかつた。音楽會が終つて、愈々舞踏會の番になつた。

「彼女と踊るのだ。彼女と。」

これがナタナエルの唯一つの望みであつたが、彼がどうして今夜の女王を誘ひ出すだけの勇氣を持ち合せよう。けれども！彼自身さへどうしてか知らない裡に、踊りが始まつた時には、彼はオリンピアの直ぐ隣りに立つてゐた。彼は殆んど一言も口を訊くことが出来なかつたが、いきなり彼女の手を握つた。

オリンピアの手は氷のやうに冷たかつた。彼は怖しい死の冷たさに浸透されたやうに感じて、オリ

ンピアの瞳に見入つた。その瞳は、併し、愛情と憧憬に充ちて彼を見返へしてゐたので、彼はその瞬間彼女の手に温い生命の血潮が脈打ち初めたのを知つた。そしてナタナエルの心の中にも愛の悦びが益々昂つて、彼はオリンピアを抱擁して、踊る人々の列に入つた。

踊りと、それから少なからず飲んだ葡萄酒とに熱せられて、ナタナエルはその晩性來の臆病さをすつかり征服して了ひ、オリンピアの傍に坐つたきりで、手を把り合ひ、夢中に興奮して自分の愛情について彼女に物語つた。併し、彼女は唯彼の顔をまともに見詰めて、歎息を吐くばかりであつた。

「あゝ、あゝ、——あゝ、あゝ、——」

そこでナタナエルは話した。

「あなたは本當に素晴らしい、天使のやうな方です。——あなたは愛の彼岸からの光です。——あなたは、私の全存在を鏡のやうに映す深い感情です。——」

といふ風な色々なことを話した。が、オリンピアはいつも唯、

「あゝ、あゝ！」

と歎息をついてゐた。

ス balan ツアーニ教授は二三度この幸福な二人の傍を通つて行つたが、彼は奇妙な満足の色を浮べて微笑してゐた。ナタナエルは、突然周囲が暗くなつたのに氣付いた。彼は我に返つて見廻すと、もう廣間はすつかりと空虚になつて最後の灯が二つだけ消え残つてゐるのを少なからぬ驚きを以て認め

た。音楽も踊りも、もう夙うの昔に終りを告げてゐたのである。

「御別れです。御別れです！」

と、彼は絶望して亂暴に叫び、オリンピアの手に接吻し、彼女の唇に身を屈めた。氷のやうに冷たい唇と、燃える唇とが出會つた。オリンピアの手に觸れた時、彼は死んだ花嫁の傳説を思ひ出して慄然とした。

「あなたは僕を愛して下さいますかオリンピア。たつた一言言つて下さい。僕を愛してゐると——」併しオリンピアは立ち上つて、唯歎息を吐いた。

「あゝ、あゝ！」

ナタナエルはまた囁いた。

「あなたは僕の素晴らしい愛の星です。あなたは僕を照し、僕の内心を淨化して呉れます。」

「あゝ、あゝ！」

と、オリンピアは歩きながら、矢張り繰り返へした。ナタナエルは彼女に伴いて行くと、何時の間にか教授の前に立つてゐた。

「やあ、娘と中々話が弾みましたね。ナタナエル君、この愚かな娘と話をするのが御氣に召したら、是非御訪問を歓迎するね。」

ナタナエルは明るく光り輝やく空を胸のや一杯に抱いて、その場を辭した。

暫くしてからのある日、ジークムントがナタナエルに訊ねた。

「御願ひだから怒らないで答へて呉れ給へ。一體君みたいな立派な男が何故あの蠅人形にそんなにまで打ち込んで了つたのだね。そりやあ、姿形はよく整つてゐるよ。まあ、美しいと言つても宜いだろう。だが、彼女の眼には生き／＼した所が少しもない。僕は視力さへ無いのではないかと思ふね。それにあの歩き方と來ては全くゼンマイ仕掛けそのまゝだし、歌だつて踊りだつてさうだ。僕等にとつては、オリンピアは全く氣味が悪いつたらないね。」

ナタナエルは漸く不快の色を壓へ付けて、唯、非常に眞面目になつて答へた。

「なるほど、君達冷靜な散文的な人間にとつてはオリンピアは無氣味に違ない。併し、我々詩的心情の持主にとつては彼女は最も良く組織された存在なのだ。彼女はほんの少ししか口敷を訊かない。併しその僅かな言葉こそ、彼女の愛と高い認識とに充ちた内界の象形文字なのだ。併し、君達にとつてはそれは何の意味をも持つてゐない空虚な言葉なのに違ひない。」

ジークムントは低聲で、殆んど悲し／＼な面持で言つた。

「失敬な言ひ分かも知れないが、君はどうも間違つた道に踏み込んでゐるらしいね。だが、いつでも必要なときには僕のことを頼りにして呉れるが良い。」

この時、ナタナエルは、この冷靜な散文的なジークムントが本當に自分のためを思つて呉れることを知り、心から手を握つた。

併しナタナエルは、この世にクララの存在することを忘れ、母も、ロタールも彼の記憶の外へ消えて去つて了つた。彼はただオリンピアのために生きて、毎日數時間づつ彼女と共に坐つて、彼等の愛に就いて、同情に就いて、また心理的な親和力に就いて、止め度なく妄想を語つた。彼はまた彼女ほど良い聞き手を持つたことがなかつた。彼女は繩物をしたり、窓から外を眺めたり、小鳥に餌を與へたり、狎と巫山戯たり、猫を弄んだり、紙片をたんだり、欠伸を噛み殺したり、などといふ不作法は決してしなかつた。そして、何時間でも身動きもせず戀人の眼に眺め入つて過した。只、ナタナエルが最後に立上つて、手や肩に別れの接吻をする時に、「あゝ、あゝ、」とか「お寝みなさい、戀人よ。」と囁くだけであつた。

スバランツアーニ教授はナタナエルと彼の娘との關係に就いて並々ならず悦んでゐるらしかつた。彼は絶えずナタナエルに對する露はな好意を示して、ナタナエルが遠廻しにオリンピアとの關係を暗示した時などは全く相好を崩して微笑しながら、それは全然娘の自由に任せるとさへ明言した。

この言葉に勇氣を得て、ナタナエルは翌日、オリンピアが今まで長い間唯愛の眺睥だけで物語つてゐたことを明白な言葉で打ち明けて貰はうと決心した。彼は故郷を發つ時に母が贈つて呉れた指環を探して、彼の深い愛情と獻身のしるしとして、また彼の新たに芽ぐみ花さき始めた生命のしるしとしてオリンピアに贈らうと考へた。その時、クララとロタールからの手紙が目についたが、彼はそれを冷淡に傍へ投げやつて、指環を探し出し、ポケットへ突込んで、オリンピアの許へ走つて行つた。人

口の階段に差しかゝつたとき、彼は内部から不思議な騒ぎが洩れて來るのを耳にした。それはスバランツアーニの書齋から響いて來るやうであつた。

足踏み——物の軋る音、——衝突する音、——扉を打ち、呪ふ聲、が雜然として入り交つてゐた。

「放せ！ 放せ！ この極道者奴！」

「こんなものに一生賭けたのか、は、は、は、は、——」

「この俺が眼を作つたんだぞ。」——「だがゼンマイは俺だ。」

「やくざなゼンマイが何だ。」

「地獄の犬め、時計屋め、——出て行け、惡魔！」

「惡魔の獸め、放さないか、放すんだ。」

それはスバランツアーニとコツペリウスの不快な聲が互に消し合つてゐるのだつた。

ナタナエルは名狀し難い恐怖に驅られて、室内へ飛び込んで見ると、教授が一人の女の肩を掴み、猶太人のコツボラがその足を捉へて、狂ほしげに奪ひ合ひをしてゐた。そしてその女がオリンピアである時、ナタナエルは深い驚愕でたじろいだ。忽ち火のやうに憤りに燃え立ち二人の荒れ狂ふ手から戀人を奪ひ返さうとした。と、その瞬間、コツボラは不思議な金剛力を出して、その女を教授の手から引きはなし、同時にその身體で教授に手ひどい打撃を與へた。教授はよろ／＼と後へよろめいて、レトルトやフランスコやフィオーレなどの置いてある机に倒れかゝつた。四邊の實驗器具は

数千の破片となつて飛び散つた。そこで、コッポラはその女を肩に荷つて、ゲラ／＼と笑ひながら階段を下りて行つて了つたが、その女の垂れ下つた足は階段に當つて固い木の音を轟かした。ナタナエルは呆然として佇んだ。オリンピアの死人のやうに蒼ざめた顔には全く眼球といふものがなくて、その代りに唯眞黒い穴があつただけである。

スブラランツアーニは床の上を轉げ廻つた。硝子の破片が彼の頭と言はず胸と言はず腕と言はず至る處切り裂いたので、血液が泉からのやうに湧いた。併し、彼は漸くのことで、力を集めて、ナタナエルに向つて叫んだ。

「奴を追つかけるんだ。——奴を。——何故ぐず／＼してゐるんだ。君。——コッペリウスだ。——コッペリウスが俺の一番良い自動人形を攫つて行つて了つたのだ。——俺は二十年かゝつた。——肉體も生命も作り上げた。——ゼンマイ。——言葉。——歩き方。——それから眼。——眼か。——眼はこゝにある。」

そこでナタナエルは、一對の血だらけの眼が床の上に横たはつて彼を見詰めてゐるのを見た。スブラランツアーニはそれを傷を受すてゐない方の手で掴んだ、彼に向つて投げつけた。それは彼の胸に命中した。忽ち狂氣がナタナエルを支配して、彼の精神と官能とは破壊して了つた。

「フイー——フイー——フイー！ 火焰の環だ。——火焰の環だ。廻れよ。火焰の環よ！——面白

いぞ、——面白いぞ！——木の人形だ。フイー。——綺麗な木の人形だ。廻れ、廻れ——」

彼の言葉は恐しい獣物の唸り聲になつてゐた。かうして彼は癲狂病院へ運ばれて行つたのである。スブラランツアーニ教授はその後間もなく全く快癒した。けれども、彼は大學を去らなければならなかつた。といふのは、ナタナエルの物語りが評判になつたのみならず、立派なお茶の席上にまで人間と偽つて木の人形を出席させたといふことが許す可からざる詐偽であると一般に思はれたからである。法學博士は、それが一般公衆を相手として極めて巧みに實行されたといふ廉を以て、それを最も巧妙で且つ最も重大なる犯罪であると断定した。ある紳士はオリンピアがお茶の席上で欠伸よりも多く嚏をしたことを力説して、それは自動的にゼンマイが巻き返される音であると結論した。詩と雄辯學の教授は嚴かに言つた。「満場の紳士淑女諸君。誰か鳥の雌雄を知らんやです。この物語はこれすべて一場の寓話なのであります。隠喩なのであります。御判りになりましたか。」併し、多くの尊敬すべき紳士達はこれで満足しなかつた。自動人形の物語りはもつと深い根を持つに至つて、遂には人間の姿に對する不信の情が人々の間に忍び込んで來た。多くの戀人達は、自分の相手が木の人形でないことを確かめるために、彼女が少々調子外れで歌ひ且つ踊ることを望み、詩の朗讀に際しては退屈して編み物をし、狎と戯れることを要求し、殊に重大なこととして、彼女がすべて思考力と感受性を前提とした口の訊き方をすることを悦んだ。多くの人達の愛の結合はそれによつて愈々固く且つ美しくなつたが、反對にまた多くの戀人達が段々と別れて行つた。お茶の席上では、嫌疑を避けるために多くの欠伸がされたが、嚏は決してされなくなつた。

スバランツァーニは刑法上の取調べをさけるためにゲーの町を逃げ出した。コッボラもまた姿を消して了つた。

数年後、ある遠い地方でクララを見かけたといふ人があつた。彼女は一人の優しさうな男と手を取り合ひ、小綺麗な別荘の門の前に坐つてゐて、その前には二人の男の兒が遊んでゐた。これによつて結論して見ると、クララは、その持前の明るい生の悦びにふさはしい家庭の幸福と平和とを探し當てることが出来たのである。そして、その幸福も平和も内心の分裂したナタナエルは決して彼女に與へることが出来なかつたであらう。

— 終 —

スキユデリ嬢の秘密

それは一六八〇年のおほかた秋の頃であらう。ひえびえとそぞろ寒氣の襲つてくる或る眞夜半のころ、バリサントーレ街のとある小さな家の戸を激しく敲くものがあつた。

このささやかな家には、優美な詩とその秀でた文才のためにルイ十四世とマントノン公爵夫人の寵を一身にあつめ、宮廷に出入りを冀されてゐたマダレーヌ・フォン・スキユデリといふ老嬢が、二人の奴婢と共に佻しい生計をたててゐたのであつた。けれどもその夜は恰も下男のパブチストが妹の婚禮のために歸國して、未だ歸つて來なかつたので、獨り起きてゐたマルチニエールと呼ぶ仲働きが、先づその門の敲く音を聞きつけたのである。最初その音を耳にした時から、もうこの女の胸は不安のためにどよめいたが、なほも續けて敲くひびきの容易にやみさうもないのを知ると、昔からこのバリで行はれた強盗や殺人のおそろしい犯罪のかずかすが一時に想ひおこされ、それに加へてかうした非常の時たつた一人の援けであるパブチストの居ないことなどが呪はしくなり、遂にはその恐怖のために身をふるはせながら室の片隅に蹲つてゐた。

けれども戸外の音は依然としてますます執拗にその激しさを加へてくる——
「開けて下さい！ 開けて下さい！ 後生だから何うぞ開けて下さい！」

と、しまひには、強く音に雑つて聞きなれぬ男の叫び聲が、マルチニエールの耳にもはつきり聞きとれてきた。此軟い言葉の様子は怯えてゐた女の心を一抹の安堵に誘つたらしく、彼女はやがて傍の燭臺をとつて表の窓口に立つて行つた。そして虚勢をはつた男の作り聲でたしなめるやうに下に向つて叫んだ。

「誰です！ いったいこんな夜半に人の家の前で騒ぎだてたりするのは。」

この時、恰度雲間をのがれた月の光は、淡灰色の外套を纏うて縁のひろい帽子を被つた脊の高い人影を、くつきりと地上に映し出した。これを認めたマルチニエールは、又もや深い疑念にとらはれたが、咄嗟の愕きを懸命に抑へながら家の内に向つて高い聲を張りあげた。

「バブチストや、クロードや、ピエールや、誰でも起きてこの無頼漢を追つばらつてしまひよ！ 早く、早く、ほら戸を毀さうとしてゐるよ。」

けれども地上の人影からは、意外にもやさしい哀れげな聲がかけられた。

「さういふ聲はマルチニエールさんぢやないですか。なにも怖がることはありませんよ。バブチストの居ないことも、御主人とあなたきりのことも、何もかもみんな知つてゐるんです。さあ、早く御主人に會はして下さい。急な用があるですから。」

「なんですつて？」 彼女はこれに答へた。

「まあ、こんな夜更けに！ もうお寐つてゐる方を、それにあんなにお齡を召していらつしやる方の

寝入りばなを、妾がどうしてお覺し出來ますか？ そんなことぐらひわからないんですか。」

「駄目ですよ。私は何もかも知り悉してゐるんです。御主人はいま作りかけのグレリアといふ小説の原稿を脇に置いて、明日マントノン公爵夫人のために朗讀される詩稿を推敲していらつしやるんです。……お願ひですから何うぞ中に入れて下さい。用件は急を要するんです。人の名譽、自由——いゝ人命にまでかかはる事です。若し私を入れないばかりに後で不幸に陥つたことを思召せば、御主人はどんなにあんたを憎むことぞせう。どうぞ考へて下さい。」遂にその言葉は涙に咽び泣いてゐた。「なんで時刻なんぞ選んでゐられませう。雷光のやうに襲つてくる破壊的な運命の災ひから、逃れようとするこのたつた一瞬時を、どうして延してなんかゝられませう！ どうか御主人に會はして下さい。危期に瀕してゐるこの不幸者をお救ひ下さるのはただその一路ばかりです！」

この若者の悲痛な呻き聲は、忽ちにして若い女の胸に軟い感動を滲してしまつたやうであつた。マルチニエールはもはや無意識に鍵をとつて、その扉を開くよりほかに仕方なかつた。扉を開けるが早いか外套の男は遽しく駆け込んで荒々しい語勢もるとともに奥に闖入しようとする。

「早く俺を室に案内してくれ。」

驚愕のあまり手燭を高く翳したマルチニエールは、思はずその男の顔を視て叫んだ。

「あッ！」

小さな光は、死人の如く蒼褪めた凄惨な容貌の上に揺めいた。しかもその醜い若者の懷中からは、

兇器の煌々と耀く柄がのぞき見えてゐた。

「早く案内しろといふのに。」

男はなほも彼女に迫つた。はや逃れることの出来ない主人の危急を見てとつた若い家婢は、年頃眞實の母親とのみ崇つて仕へてきたひとに對する愛情の焔が一時に燃え立つのを覺え、矢庭に奥に通ずる扉をしかと後手で押へながら、きつぱりと男の前に立塞がつて言つた。

「戸外でのあの慄れつばい仕草——それに引きかへてこの亂暴な舉動——よくわかつてゐる。若しもお前が青天白日なら明日またお出でなさい。何と言つても今晚は會はせることは出来ません。さあ、さつさと早く出て行つて貰ひませう。」男の掌は短劍の柄を握つた。けれどマルチニエールは斷乎として其處を動かうとはしなかつた。「さあ！ お前の惡を遂行しなさい。お前だつて近々あの恥づべきグレエヴの刑場に曝し物となる日が来るでせう。お前さん達同類のされたやうにさ。」

「あッ！」女の言葉の終るかいなや、突然醜い若者は大きい叫び聲をあげた。

「マルチニエール。お前さんの言ふ事は尤もだ。成程、さやう俺はこの通り押込みや人殺しの恰好はしてゐるさ。だが俺の仲間が刑罰なんか受けやしない。さうだ、刑罰なんか受けちやあいない。」

光つた刃はもうその鞘から抜きとられてゐた。

「神よ。」

マルチニエールの瞳は、充分に致命の一撃を觀念しながら閉ざされてゐた。

この時、あだかも巡邏の憲兵隊がこのサントノレ街に入つて來たのであらう。喧騒な馬蹄と武器の軋りが響きわたつて、彼女の鼓膜には急に新しい何物かが甦つた。

「憲兵さーん、助けて！ 助けて！」

彼女はあらん限りの聲をふりしぼつた。

「え、！ 萬事休せりだ！」

と、呟きながら、この突發的な出來事にうろたへた外套の男は、女の手から振り奪つた燭臺の灯をふき消してから、一つの小筐を彼女の掌のなかに押しつけて、

「非道いやつだ。お前は俺の破滅をねがふんだな。うむもう是までだ。ただお前の倅ひのためにだ、これを老嬢にわたして呉れ。」

これだけ言ひ置くと疾風の如く、男は凄じい勢ひで戸外の方へ驅け去つてしまつた。

マルチニエールはこの時床の上に仆れてゐたが、やがて漸くのおもひで闇を索りながらやつと自分の部屋に入つたものの、劇しい愕きと怖れのために疲れ切つた體を安樂椅子に投げ仆すと、そのままもう起ちあがる力とはなかつた。

ほんの暫くすると、入口の方にあたつて何者が嵌めたきりになつてゐた扉の鍵を、がちやがちやいはせてゐるのが彼女の耳に聞えてきた。と、また今度は扉を閉め錠をかける音がして、更に心もとない蹙音がしづしづと近寄つて來た。彼女は又も身に迫る災害を豫期して、ただ不安げに身を慄はして

あると、部屋の扉を開けて入つて来たのは、灯の下に一目でさとるこの出来たバプチストであつた。が、死者のそのやうな青白い彼の顔には、明らかに何事かのため心を擾されてゐることを讀むことが出来た。

田舎に歸つてゐたこのマグダレーヌ家の下僕は、昨夜このかた何とはなしに留守中の主人の身が氣づかはれて、たうとう居たたまらず、倉皇として巴里に舞ひ戻つて来たのであるが、サントノレ街に差しかゝるや偶然巡邏中の憲兵の夜警隊に咎められてぐづぐづしてゐたところを、恰度其處に居會はしたデグレエ中尉が疑ひを解いてくれたのでやつと釋放され、主家の入口にまで來かかると矢庭に短刀を抜き放つた兇惡な人相の男が中から飛び出し、彼を突きつけて風の如く闇の中に姿を隠してしまつたのである。しかも恚つした出来事に續いて更に家の扉は開放しになつてゐる——仲働きのマルチニエールは昏倒してゐる——といふ光景に直面した彼の心は、やつぱり蟲が知らせたやうに主人の身の上の危禍が降りかかつたのではないか……とひたすら不安に心を擾されてゐたのであつた。

……けれどもやがて常態に復したマルチニエールによつて總ての次第を物語られたのでバプチストはやつと安堵の胸をかき撫でることが出来た。とは言ふものの、二人は先づ怪しい男から渡された小筐の始末について殆ど困つてしまつた。そして様々な相談の結果は、兎も角も朝になつたら主人にこの出来事の顛末をお話して、その上筐については然るべき最善の處置を仰がうといふことになつた。マグダレーヌ家の僕婢たちが深い懸念に支配されたのも無理ないことであつた。その頃巴里の市では

頻々として巧妙な犯罪が勃發して、人心はただ惴々として立怪極らない殺戮を傍觀してゐるより外はなかつたのである。それは嘗つて恐ろしい毒殺事件が永い間この都を脅壓し痺撃させた以上に、今亦不敵な竊盜團が全巴里の上にくまなく魔の手を擴げたのであつた。といふのは、金銀、寶石——ありとあらゆる高貴な粧飾品が、それを購めたものから直ちに竊盜され、更に際どいことにはそれらの貴重品を持つて夕暮外出する者はすべて掠奪の運命に逢ひ、あまつさへその多くは殺害されるといふのであつた。その殺人の手段は一樣であつた。——被害者の悉くは、銳利な兇器による胸部の一撃の下に脆くも果て、ゐた。しかもその創痕は著しくあざやかな致命的なひと刺しであることから、加害者の手練の如何に怖しいかは全く想像に剩りあつた。さうした魔の手は遂に辛刺にも、ルイ王朝の爛熟した風紀に息づく幾多の貴人の上にも降りかかつた。淫らな慾情を満さうものと、高價な贈り物を携へ、夜を忍び行く貴公子たちは、ある者は路傍にあへない最後を遂げ、ある者は情人によつて血まみれた死骸を彼女の室の前で發見さるやうなことが屢々あつた。

かうして犯行に對する法衙の力は何等効を奏しなかつた。警視總監アルジャンソンも、裁判所の長官ラ・レニーも全くこの犯罪には手古摺つてゐた。なかでも憲兵隊吏のデグレエなどは多大の好奇心をもつて虱つぶしに犯人を探索したが、踪跡は皆目知れず、盜品は一つとして上らず、あらゆる智囊を絞らせて行ふ策略は一つ一つ裏を搔かれていつた。しかも不思議な横死は頻々として傳へられた。或夜のことに、ド・ラ・フール公が高價な飾物を持つてその情人を訊ねることを知つたデグレエ

は、公をルウブルの近くで待設けその跡を付けたことがあつた。けれども彼が尾行して未だやつと一町も行かないうち、突然恰かも地上から抜け出たかのやうに一つの人影が現はれ、忽ちド・ラ・ファール公を毆打して體の上に被ひ蔽つた。これを目撃したデグレエは心ひそかに今夜の捕物の首尾を心に描いてゐたものの、この一瞬の椿事に面喰つて、隠れ場から飛出す際に裾が纏れてどうと打倒れた。が、屈せぬ彼は逃してなるものかと矢庭に呼笛を高く吹き鳴らした。これに伴つて四方からは一時に呼笛が應へられ、遠近からは俄かに蹄や劍の軋る音が崩れるやうに起つた。けれどもこの時怪漢は既に目的を達し一目散に闇の中を衝いて逃走した。デグレエは漸く起ち上つて月光を便りに賊を追跡した。この追跡がニケエズの街に入つた時、賊は少し足を緩めたのでデグレエは僅々十五歩位の處まで追付くことが出来た。が、この時、賊は突然とある石塀に身を寄せたと思ふ間もなく不思議にも姿を消してしまつたのであつた。この夢のやうな出来事に直面したデグレエは暫く茫然と其處にたたずんでゐたが、やがて追手が駆けつけると共に一應その附近を嚴密に調べてみたが、それは遂に無駄骨に終つてしまつた。影を失つたといふ石塀は或る石造の屋敷のもので、どんなに綿密な探索を行つても戸や窓や穴の痕跡は少しも發見出来なかつた。——この神變不可思議な出来事は間もなく巷間に擴がつて、この話を潤色したさまざまな奇怪な繪物語が都の隅々まで賣られる有様になつた。巴里に棲息する人々の恐怖と戦慄は今や最高潮に達してゐた。人々はこの奇怪な事件に對する、國王ルイ十四世の心を動かさうと努めた。

寵妃マントノンの客間——ここでは常に多くの朝臣たちと政務を攪られる習慣になつてゐたが、或日の午後のこと、危嶮に遇つた貴婦人たちの名を連ねた一篇の詩稿が此處に届けられた。詩に謳はれてゐることは、つまり自らの不幸を嘆いたもので、慇懃のために戀人に高價な贈物を持つて行かうとすれば、自らの命を賭けねばならない。武勇によつて戀人のために血を灌ぐは名譽であり誇であるが、武裝をゆるされぬ奇怪な暗撃を受けるのは本意でない。あらゆる愛情とその慇懃の明星たるルイよ、何時も大敵を屈伏する至善の勇者よ、希くばヘルクレスがレルナの大蛇を、テゼウスが半人半牛の怪物を滅したやうに、あらゆる愛情と歡喜を深い悲愁に陥らず妖怪を退治せられよ。……といふ意味のものであつた。

王は讀み終つて、さてマントノンに意を聽かうと振向いた時、恰度彼女の胸にゐたスキュデリに眼がとまつた。

そこで王は微笑みながら、詩稿を開いてスキュデリに示した。これを恭しく受取つて暫く讀み續けてゐた彼女は、やがてもの靜かに立ち上り少しく頬を染めながら伏目になつて言つた。

「人目を忍ぶ通ひ路に、寄る白波さくといへば、

思ひの海に浮き沈み、慕ふ甲斐こそなかりけれ。」

この簡勁な言葉の前に、長い文飾を凝した絢爛な詩句は忽ちにしてその光を失つてしまつた。

氣味のわるい小篋を持つたバプチストとマルチニエールの二人は、あの事變のあつた夜が明けると

直ぐに主人の室に来てスキュデリに一五十什を物語つた。しかし意外なことには、未だ不安の醒めきれぬ僕婢たちの心配や色々の注意があつたに拘はらず、老嬢は潤達に微笑しながらその懸念を打消したのであつた。

「お前達はお化でも見たのかい。妾が人に殺されてまで奪られるやうな寶を持つてゐるかどうか——それにこの七十の坂を過ぎた妾が、何で人に命を狙はれるやうな事をしてゐやう。この男は何も悪い人間ぢやないよ。さあ、マルチニエールや、もう怖い話は止めて早くこの籠を開けてみよう。」
かう言ひながら彼女はその祕密にみた小籠をとつて、突き出てゐる蓋の釦を押した。この瞬間！
バプチストはただ短く「あッ」と叫ぶや半ば跪き、伸働きは思はず後によろめいた。
お、小籠からは見事な寶石に鑲められた黄金の腕環と首飾が、折からの朝の光に燦然と耀きわたつたではないか。

暫くの間、人々は驚きのために心を失ひ、豪華な飾物のために全く眼を奪はれてゐたが、やがてそれに續いて籠の底から折疊まれた一片の紙片が発見された。スキュデリはこれをして眼を通したが、忽ち紙片はひらひらと彼女のわななく手から落ちた。何故か、彼女は急に生氣のなくなった體を、安樂椅子のなかに投げ仆した。さうして力ない瞳で天に訴へるやうに、涙聲で叫んだ。

「お、何といふ辱しめだらう。神よ。妾が心ともなく詠んだ言葉ゆゑに、こんな血に汚れた悪魔の侮辱を受けねばならないとは——」

マルチニエールは、おそろしい衝撃を主人の身に與へた不吉な紙片を床からとり上げた。そこには次のやうに認められてあつた。

人目を忍ぶ通路に、寄る白波さくといへば、
思ひの海に浮き沈み、慕ふ甲斐こそなかりけれ。

敬愛なるスキュデリ嬢よ。貴女の聰明なみ心によつて、怯懦な人々の願ひは退けられまし
た。この品は私共の感謝のほんの印です。貴女の崇高な心を飾ることはとても出来ませんが
私どもが今日まで蒐めたうちで一番高價なものです。何卒お納めの上今後お見捨てなくよろ
しく。

見えざる者たちより。

いろいろと思ひめぐらした末、スキュデリはサツと心を落着けて、直ぐにその小籠を携へてマント
ノン夫人のもとに車を走らした。

何時になく蒼ざめた顔のスキュデリが、よろめきながら客間に入つて来た時、夫人は思はず彼女に
その仔細を糺さずにはゐられなかつた。そこで一五十什は老嬢の口から物語られ、小籠の中にあるも
のは其處に取り出された。夫人はそれらの粧飾品を手にとつて細密に眺めてゐたが、内心その優美な
出来榮に驚歎の喚びを禁ずることは出来なかつた。このやうな巧緻な技術、このやうな高價な寶玉の
飾は、さすが四時華奢な生活に耽るこの夫人も未だ見たことのない品であつた。

夫人は急にふり向いて言つた。

「スキュデリ嬢。なんといふ見事さでせう。今時の巴里でこんな巧みな細工をするものは、ルネ・カディヤックを除いて他にないでせう。」

——ルネ・カディヤックといふのは、その頃この都で誰知らぬ者のない腕の冴えた師匠であつた。さうしてその巧妙な技術と共に、彼の奇矯な行ひも亦夙に人の知るところであつた。小柄であつたが骨格のがつしりした肩幅のひろいカディヤックは、もう五十をとくに過ぎてゐながら尙ほ青年をも凌ぐ身軽さをもつてゐた。赤い頭髮と、窪んだ緑色の眼は時として人に無氣味の感を與へたが、憐み深い、彼の性行は人々の等しく認めてゐるところであつた。彼の技術は、心底から寶玉の天性に親しみそれに自らの靈魂を打ち込むものとも謂はれてゐた位であつた。どんな貧者の依頼でも、恐しい程の熱望と破格な報酬とで引受けた。人々は晝夜わかつた彼の仕事場から槌のひびきを聞かぬことはなかつた。仕事に對する彼の氣質は、數日間不眠不休で完成した仕事でも、一寸した點に氣に入らぬところがあると、直ぐ様垣塙に投げ込んでしまふといふやうなところに特色を表はしてゐた。

けれども彼の氣質の特色は、もつと奇矯なところにあつた。なぜかといふに、カディヤックは、よしや充分に出來上つた品だとして、自らの創造物に對する愛着から、決して直ぐには返さなかつた。どんな貴人の依頼でも、どんな過分な報酬でも、いざ渡す段になると、彼は定つたやうに様々な理由の下に猶豫を求めた。さうした末、結局註文者の強請に讓る時は、あからさまな狂憤の色をその顔に現はさずには居られなかつた。

スキュデリはいたく嬉んだ。この飾の製作者に訊せば、難なく持主が知れやうと思つたからである。マントノン夫人は直ちに使ひを飾匠のもとに遣つた。カディヤックの姿がこの客間に現はれたのは、それから間もなくのことであつた。

夫人は直ぐと、暗緑色の覆ひのある机の上に輝やく飾を指しながら、一應これが彼の作であるか否かを訊ねてみた。カディヤックは暫く夫人の顔を見つめてゐたが、すばやく貴金屬を筐の中に納めてはつきりといつた。

「もしこれが私の作でないなぞと一寸でも思ふ者がありましたら、それは未だカディヤックの眞價を知らぬものです。」

「では——」と夫人は重ねて問うた。「一體、お前は誰に頼まれてこれをお作りか？」

カディヤックはきつぱりと答へた。
「ただ私のために作りしました。」さうして二人の顔が充分疑念に包まれてゐるのを見ると又も語り出した。「不思議にお思ひになるのは御尤もですが、これは私が永い間に良い寶石を捜し蒐めた擧句、その美しさを樂むあまり暇にあかして作り上げたものです。けれどもつい先頃、仕事場から紛失いたしましたもので御座います。」

この言葉の終るや、俄かにスキュデリはカディヤックの傍らに進み寄り、歡びに眼を躍やかせなが

ら聲高く言つた。

「あ、うれしいこと、ルネ、これを取戻しなさい。あなたが盗まれた大事な品を。」

これを聞いてもカディヤックは急に起たうとはしなかつた。唯黙々と俯向いたなり何事か心に煩悶を重ねてゐるやうに見えたが、やがて頭をもたげたかと思ふと、スキュデリの前に跪いて言つた。

「この筐があなたの手に渡つたといふことには、争はれぬ運命があります。實のところ、これを製作してゐる時、常に崇高なあなたのことが心を離れませんでした。今となつてやつと思ひ出しました。これは當然あなたのものであります。どうぞ、私の一番出来のいい作として、お體につけていたゞきたう御座います。」

スキュデリはこの申し出でをさまざまに斷つたがなほも執拗に言ひ迫るので、傍の夫人が彼女の手に無理にとらせた。するとカディヤックはさも嬉しげに半ば涙に咽びながら彼女の上衣や手に接吻して、あたふたと凄じい勢ひで室の外へ駆け走つて行つた。

幾月か経つた或る日、スキュデリは偶々モンタンシエ公爵夫人の硝子馬車に乗つて、ボンヌフ橋に差しかかつた。その頃は未だ硝子馬車の珍しがられた時代なので、人々は忽ち群つて来て、暫くの間馬が動かなくなるまでに車を包圍してしまつた。と、その時、彼女は急に外の方に罵りざわめく聲を聞いたので、ふと外を見ると、群衆を掻き分けながら脇目もふらずに前進して来る一人の男があつた。その男は蒼ざめた悲痛な容貌の若者で、肘や手で人波の中を蹴きながらやつと車に近づくと、遠

しく扉を開けて一通の手紙を彼女の膝に投げつけると、また元のやうに何處ともなく姿を掻き消してしまつた。が、彼女の傍らにゐたマルチニエールは、この男の顔を認めるや、愕きの叫びと諸共に襦の上に倒れかゝつた。これに驚いてスキュデリは劇しく索を引いたが、馭者は何を思つたか、まるで悪靈にでも驅け立てられたやうに一勢強く鞭打つたので、馬は周章ふたためいて泡を噴きながら、前足でつちたち上つたと思ふ間もなく烈しく疾走して、轆轤のひびきを立てて橋を渡つた。

スキュデリは手早く嗅薬を出して、氣絶したマルチニエールに吸はせたので、やがて若い家婢は息を吹き返し、痙攣的に取り纏りながら、恐怖の色を青白い顔に浮べてやつと口を開いた。

「あの男は何をしたのです？ お、ほんたうにあの男に違ひありません！ あの晩筐を届けた恐ろしい人はあれです。」

スキュデリは興奮してゐるマルチニエールに、心配はないと宥め賺しながら、渡された手紙を披いて、次の文句を読むことが出来た。

悪運——が遂に私を奈落に墜してしまひました。私は恰も母に對する子の愛をもつて貴女に

御願ひいたします。それは私から御納め下さつた首飾と腕環とを、明後日までには師匠カディヤックの許に御戻し下さい。貴女の幸福も、貴女の生命も全くこの事に係つてゐるのです。

さもなき時は餘儀なく御宅に押入つて、私は目前で自害して果てます。

翌日になつて、スキュデリはカディヤックを訪ねようと思つてゐると、生憎恰も巴里のあらゆる文

人異客が申し合せたやうに、彼女の家に訪ねて来たので、兎角談笑のうちに晝近くに及んで、はやモ
ンタンシェ夫人との約束の時間となつてしまつたので、飾匠の家に行く事は餘義なく翌朝に延すこと
となつた。

スキュデリの心には、あの蒼ざめた若者の顔が描きつけられてゐた。しかもその容貌は遠い記憶の
うちに在るもののやうに思はれた。不安な夢が夜の微睡を妨げた。若者は夢の中にまで、手を差しの
べて救ひを求めてゐるやうであつた。

次の朝、飾匠の家に急ぐスキュデリの車がニケエズの街に差しかけた時、町中は俄かに溢れるや
うな群衆の波にどよめいてゐた。人々は口々に「人殺しを出せ！」と罵り喚きながら、カディヤック
の家の戸口を包圍んで殺倒した。暫くすると、デグレエが縛された一人の若者の鎖をとつて入口に現
はれた。突然「人殺しだ！」と叫喚する群衆の凄愴な呪ひと共に、家の中からも亦甲高い悲痛な叫聲
が漏れて来た。けれども多数の警吏はものともせず男を曳いて行つた。この光景を遠くから眺めてゐ
たスキュデリは、ふとその曳かれ者の横顔を見て、我を忘れて「もつと前に！」と馭者を急がせた。
車は巧みに人波を分けて飾匠の家のすぐ前までいつて、止つた。そこでスキュデリは、デグレエの膝
に泣き絶つてゐる美しい一人の娘を見た。髪は解け亂れ、半ば剥れた着物を物ともせず、その女は顔
に暴い不安と絶望を示して、まるで悲しみに癡癡したやうな甲高い聲を擧げて。
「無實です！ 無實です！ あの人に罪はありません！」と、なほも訴へてゐた。

デグレエも、その配下の者も、その娘を様々に制御したが無駄であつた。——と、デグレエの手に
力が餘つたのか、娘がよるめいたと思ふ間に、小さい體は階段から路上に轉び落ちた。スキュデリは
もう堪りかねて、

「何うしたといふのです！」

と高い聲をあげながら車の扉を開けて出た。人々はざわめきながらも路を開いた。親切な二三人の
女が、群衆から出て来て娘を抱き起し、薬水で額を摩つてゐるのを見ると、彼女はデグレエに近寄つ
て性急に再び訊ねた。

「大變な椿事が出来しました。」と彼は答へた。「今朝、ルネ・カディヤックが刺し殺されてゐたので
す。犯人は弟子のオリヴィエ・ブリュソンで、今しがた曳かれて行つたばかりです。」

「では、この娘さんは？」

「娘のマデロンです。犯人はこの娘の情人だつたのです。けれどこんなに無罪を云々して泣きわめく
ところを見ますと、どうやらこの事件の共犯者と思はれる點もあるので、憲兵隊に引渡さうと思つて
ゐます。」

かう言ひながら、さも意地の悪い視線をマデロンに注いだ。しばらくして、人々がカディヤックの
死骸を家の中から昇ぎ出して来た時、スキュデリは彼に向つてきつぱりと言ひ放つた。

「一寸思ふふしがありますから、當分このマデロンを妾におあづけ下さいまし。では、後のことを宜

敷く。」

名の知られた女詩人のこの言葉に、今が今まで石をも投げまじい形勢にあつた群衆の間には、急に同情のささやきがとり交されて、デグレエが溢々と返事をする間も與へず、人々は氣を失つたマデロンを助けて、車の中に導き入れた。

その頃巴里で第一といはれてゐた醫師セロンの努力で、マデロンは間もなく息を吹き返した。彼女はスキュデリに對する感謝の涙に咽びながら、請はるゝまゝに前夜の出来事を物語つた。

真夜中ごろ、マデロンは部屋の扉を敲かれて起され、意外にも父の危急を、オリヴィエによつて知らされた。二人が蠟燭の灯を便りに仕事場の戸を開いたときには、血に染れて斃れ伏したカディヤックは、もう蟲の息同様であつた。それでも様々な介抱の後にはいくらか正氣づいて、何事も言はず靜かに娘の手をとると、オリヴィエの手の上に乗せて堅く押しつけた。二人はずつと前から戀におちてゐたので、理解あるカディヤックの情に感激して、暫くは無言のまま彼の寢臺の前に跪いてゐた。と、次の瞬間劈くやうな叫び聲を擧げたと思ふ間もなく、彼は後ざまに倒れつひに息を引取つてしまつた。

この突然の不幸事に、マデロンは死骸に取纏り、夜つびで悲痛な哀哭にむせんでゐたが、やがて夜が明けると同居人によつて、この出来事は憲兵隊の耳に達せられた。——オリヴィエは、その夜遅く師匠と共に歸つて來た途中、目前で何者かに斬りつけられたが、大した傷ではないと思つて、重い體

を家まで運んで來たのだとマデロンに語つた。けれども警吏は殺害者として彼を獄に曳いて行つたのであつた。

始終を語り終つたマデロンは、なほオリヴィエの日常が何んなに篤行と實直に充ちてゐたかを述べて若し彼が實際に父を殺したとすれば、それは惡魔の恐ろしいちからがさせたわざだと信じてゐると言つた。

スキュデリの聞いたところに依ると、オリヴィエの法廷の陳述も、彼の日常の行ひも、すべてマデロンの言葉に符合してゐた。さうして、マデロンがなほも在りし日の家庭に就いて、それが何んなに平和と希望に満ちてゐたかを話せば話すほど、死刑に行かんとする彼に對する疑ひは、彼女の心から刻々影を失つて行つた。——遂には、どんな犠牲をもつてしても、あの不幸な若者を救はねばならぬと決心した。

そこで彼女は考へた。國王の慈悲を仰ぐことは最も容易だと思はれるが、それより先きにあのラ・レニーを説き伏せることが何よりだと思はれた。

ラ・レニーは恭々しい慰撫をもつて老嬢を迎ひ入れた。彼はこの知名の女詩人が、オリヴィエの身の潔白なことに就いて、述べる言葉を傾聴してゐたが、やがてスキュデリの語るのが終るのを待つて、惡意ありげな微笑で語り出した。

「なるほど、戀する娘の涙ゆゑに、貴女がさう信じられるのは誠に無理のないことでせう。いや、汚

らはしい犯罪なぞに極めて疎いといふことは、反つて貴女のやうな高潔な心の所有者には應はしいこととす。——で、先づ私は今ここに、あの事件に關する刑事訴訟の経過を説明して、何ういふ推理法で私たちが虚偽の假面を引剥すかを、お耳に入れて見ようといたします。——あのルネ・カディヤックの殺害された朝、御承知の通り現場には娘のマデロンとオリヴィエとの二人が居たといふ次第です。さうしてなほ證據品として、オリヴィエの部屋から血に塗れた、しかもカディヤックの削口の大きさと寸分違ひのない短刀が、われわれに依つて發見されてゐるのです。——それなのに、彼の陳述によりますと、あの夜彼の目の前で師匠は殺されたといひ、その時一緒に居たに拘らず二十歩も離れた場所ですれを目撃したといひ、更に彼等が何用あつて深夜に外出したかは一切口を緘して居ります。これらは追求すれば誠に少しの根據も認められぬ譯でして、しかも残念ながら貴女の同情を、根元から覆さねばならぬことは、私共の嚴密な調査に基いて、カディヤックが決してあの晩外出しなかつたことが證明されてゐるのです。といふのは、あの家の入口の扉ですが、……あの扉は、開閉する毎に鏢鉸で不快な音をたて、軋るので、最上層の室に住む者でさへ明らかにその響きを聞きとるところが出来得るものです。さて、それで、あの家の一番下の室には、クロオド・バトルといふ八十に近い老人が一人の家婢と住んでゐるのですが、その二人の證言によりますと、あの夜九時頃たしかにカディヤックが下に降りて来て、戸締りをした後また階段を昇つて行き、居間に這入つて夕べの祈禱を讀んで、暫くして寢室に入つたといふことを、すべて音によつて一々知つてゐたと言ふのです。クロ

オドは不眠症に罹つてゐましたし、彼の家婢はその時分未だ歴代記を讀んだり、眠られぬまゝに部屋の中をあつちこつちと歩いたりしてゐたといふこととす。さうしてやがて四邊が鎮り返つた眞夜半頃、急に直ぐ上の部屋から劇しい蹙音と、何か重いものを引摺り下したやうな音が、鈍い呻き聲と共に聞えてきたので、二人はいたく愕きながら、まんぢりともせず夜の明けるのを待つてゐたといふのですが、御承知の通り朝の光とともに、暗黒の真相は、つまり白日の下に曝されたといふ次第です。「では——」スキュデリはラ・レニーの言葉を遮つた。「あの若者が何うしてそんな恐しい行爲に出たかといふ動機に就いては、一體何ういふ御考へですか？」

「左様、カディヤックは決して貧乏ではありませんでしたな。それに立派な寶石をあまた所有してゐました。」

「けれど、凡ては娘が繼ぐ筈ではありませんか。貴女はオリヴィエとマデロンの婚約をよもやお忘れではないでせう。」

「しかし、例へば他人に分配せねばならぬとか、頼まれて殺すとかの場合もありませう。」

「分配する？ 頼まれてですつて？」

「びつくりして聞き返す言葉を他に、ラ・レニーはなほも續けた。」

「お聞き下さい。吾々法術のあらゆる辛苦と探究を嚙つて、久しい間全巴里の上に威力を振つてゐたあの奇怪な竊盜事件に、オリヴィエ・ブリュソンは最も深い關係をもつて居るのです。カディヤック

の致命傷は、全くあの不幸な横死者たちのものと同性質であり、なほこの疑念を顯著にすることは、彼が捕縛されてといふものは、あれほど頻發した出来事がばつたり止んだといふ明白な事實です。それを見ても彼がその徒黨の重要な一人であることは推けること、思ひます。未だ自白に及びませんが、本官は是が非でも彼が白狀するまで、嚴肅な詮議を續けるつもりであります。」

「では、あのマデロンは？」

「勿論、潔白を保證する何の論據がありませんか。あの女の涙だとして、何うして父親のためとのみ言はれませう。恐らくはただ殺人者のためばかりではありませんまいか。——御迷惑でも、いづれ貴女の被護者を引取りに参りますから、よろしく御渡しのほどお願いいたします。」

……スキュデリは身慄ひした。この冷酷無情な男の心は、ただ人の秘密を探つては、そこから罪惡を引出すためにのみあるやうに思はれた。歸りしなに、ラ・レニーは又も慇懃に出口に送り出した。階段に今一足を出さうとした時、彼女の胸のうちはふと或る考へが過ぎていつた。

「オリヴィエに一度會はせては呉れませんか？」

老嬢の意外な頼みに、彼は訝しげに少し顔を歪めたが、やがて、それは彼獨特の狡猾な微笑に變つた。

「では、あの男を直接にお試しにならうと仰有るのですな。結構でせう。若しあの暗い犯罪の棲家をお厭ひなければ、二時間だけ貴女のために戸を開けさせませう。」

スキュデリが目的の場所に着いた時、獄吏は彼女を明るい大きな一室に案内した。間もなく鎖の音を引摺らせて、一人の囚人が彼女の前に連れ出された。囚人を一目見た彼女の顔は、忽ちに蒼白と變りそのまゝ、其處へ昏倒してしまつた。暫くして生氣に復し眼を開いた彼女の前には、もうオリヴィエ・プリュソンはゐなかつた。彼女は最早このあさましい罪惡の巢窟に居たたまらず、性急に傍らの獄吏に歸りたい旨を申しつけた。

スキュデリが驚愕のために氣絶したのも無理はなかつた。囚人として引出されたオリヴィエこそ、かつてボンヌフ橋上で手紙を投げ込んでこのかた、腦裏を去らぬ蒼ざめた若者ではなかつたか！

ラ・レニーの嫌疑は確かめられた。彼はあの怖るべき竊盜團の仲間に違ひない。確かに彼が師匠を殺したのだ。——しかし、無邪氣な鳩のやうなマデロンは？ 懷に飼つてある蛇を直ぐ投げ棄てやう

——いつの間にか慙ういふ決心をもつて、スキュデリは馬車から降りた。室に入ると、待ち構へてゐたマデロンが、波立つ胸の上に両手を合せ、老嬢の足許にひれ伏した。天使のやうに美しいその瞳には、救ひと慰めを求める可憐な涙が光つてゐた。スキュデリは氣を落着けて言つた。

「出て行きなさい。——正當な裁きの下にある殺人者を懲れむのはお止めなさい。ただあなたの身にかけて罪がかゝらぬやう。」

この言葉を聞くや否や、マデロンは絶望の聲を擧げて床に仆れた。老嬢はマルチニエールに娘の介抱を托して、自分は別の室に去つた——。

スキュデリは、全く心の底から打砕かれ、最早憎むべき欺瞞の人生に呼吸することが堪へられなく思はれた。この長い年月、心に道徳や信實の信仰を許して置きながら、今となつて輝くその畫像を毀した、運命といふものを呪はずにはあられなかつた。

ふと、別の室からは、マルチニエールに連れて行かれながら、悲歎に暮れるマデロンの泣聲が聞えて来た。

——あゝ、たうとう、あの方までが、あの方までが私を見棄てた。何處まで不幸なのでせう。お、オリヴィエ様！

スキュデリの胸には、全く責苦のやうにこの泣聲が衝き入つた。今やオリヴィエを憎む心と、彼を救はねばならぬといふ心とが、大きなゼレンマとなつて、彼女の頭腦の中でたがひに鎗を削つてゐるやうであつた。

——悪魔よ。何んな理由があつて、妾をこんな恐ろしい事件の渦の中に捲きこんだのか！

この時、慌だしくバブチストが室に駆け込んで来て、恐る恐るデグレエの不時の來訪を取次いだ。

「バブチスト。お前の驚くのはもつともだが、何で妾に心配なことがあらう。さあ、いいから連れておいで。」

やがてデグレエは室に通され、黙禮するなり直ぐに用件を述べ出した。

「長官ラ・レニー氏からの重大な用務を帯びて、貴女にお願ひに参りました。——實は、重大犯人の

嫌疑者たるオリヴィエ・ブリュソンが、貴女のお顔を見て以來、まるで半狂亂の有様なので御座います。それに彼は近頃になつて急に、基督や神々の御名を口に致し、訊問の度に自分は他の罪によつて受ける死は、最早覺悟してゐるが、師カディヤックを殺した者は自分ではないと斷言して、他は一切口を開きません。彼の言葉は明らかに他の罪を肯定してゐるのですが、何んな拷問も無駄です。ただ彼が誓ひますには、貴女一人だけに総ての罪を自白すると申します。スキュデリ先生よ。何うぞお身を卑下して、ブリュソンの懺悔をお聞き下さいませんか。」

この都合のいいデグレエの頼みに、一時は非常に立腹したが、よくよく熟考の末、彼女はおのづと自分の心の中に、意志なく填り込んだあの恐ろしい秘密の解明を要求する崇高な力を感じないわけにはゆかなかつた。突然彼女は嚴肅に答へた。

「神は妾に落着きと力をお恵み下さるでせう。では連れてお出でなさい。オリヴィエの話聞くことにしませう。」

恰度オリヴィエが怪しい小籠を持つて来た時のやうに、眞夜中ごろマダレーヌ家の戸口が敲かれた。豫め言ひ含められてゐたバブチストは扉を開いた。やがて静かな蹙音と鈍い嘯きとで、囚人を連れてきた兵士達が廊下々々に分れたことを知ると、氷のやうな冷たい戦慄が老嬢の軀を襲つた。

靜かに室の扉が開いた。縛を解かれちんとした身なりのオリヴィエを後に從へて、デグレエが這入つて来た。彼は慇懃に頭を下げると、オリヴィエを一人残して室を立ち去つた。

プリュソンは、矢庭に老嬢の足もとに跪くや、両手を胸に組み合はして激しく視つめた。歎き訴へるかのやうなその瞳からは、滾々と涙があふれ落ちた。

スキュデリも暫くは色を失つて、無言のまま若者を視おろしてゐたが、その覆れた悲痛な容貌からは、明らかな純真の心の影を認めずには居られなかつた。凝視すればするほど、彼女は過ぎ去つた遠い記憶を追ひながら、若者の顔の中に誰ともなく見覚えのある面影が彷徨ひ浮ぶのを感じたのであつた。——すべての不安は消え去つた。もはや、目の前の男が怖るべき殺人鬼であつたといふことを忘れてしまつたかのやうに、彼女の唇からは温かい言葉があふれ出た。

「さあ、何んなお話かお聞きませう。」

若者はもの憂げな烈しい吐息とともにや、甲高い聲で言つた。

「おゝ、スキュデリ様。貴女はもうこの私をおわすれになつてしまつたのですか？ けれどアンヌ・ギョオオといふ名はよもお忘れにはならぬでせう。あの人の子オリヴィエ、貴女の膝にあやされたオリヴィエこそこの私です！」

これを聞くと、思はず老嬢は両手で顔を埋め、長椅子に倒れるやうに腰をついてしまつた。

老嬢が愕いたのも無理はなかつた。アンヌ・ギョオオとは、幼ない頃からマダレーヌ家に居つて、スキュデリの深い情によつて育まれた或る貧しい家の娘であつた。アンヌが漸く年頃になつた時、クロオド・プリュソンといふ氣立てのいい美しい青年が彼女を貰ひたいと申出でた。クロオドは

當時時計匠として相當に暮してゐたし、一方アンヌも彼を憎からず想つてゐるらしい様子なので、スキュデリはこの結婚に直ぐ賛成した。クロオドとアンヌはやがて幸福な愛の巢に合歡する身となつたが、この二人の情愛の絆を一層強く結びつけたことは、間もなく彼等の間に母親のやうに美しい男の子が生れたことであつた。——そのアンヌの美しい子供が今スキュデリの目の前に立つてゐたのだ。プリュソンが妻子を伴つて生れ故郷のジュネヴァに行つたとき、音信を絶つてこのかた既に二十三年を過ぎた今日！

「まあ——お前があのおリヴィエだとは。」

幾分氣を静めたスキュデリはさう呟いたなり、餘りのことに續く言葉はなかつた。オリヴィエはなほも續けた。

「スキュデリ様。貴女だとして、かつては御自分の膝の上に愛撫した幼ないものが、今このやうに殺人犯としてお目の前に現はれるとは、よもやお考へにはならなかつたでせう。——私に咎がないとは言へません。よし有罪の宣告を受けて首斬役人の手に果てやうとも、決して悔ゆるところはありませんが、唯一つ貴女に信じて戴きたいのは、私が未だかつて人を殺したことがないこと、ましてやカディヤックの殺害者ではないことです。——今これらを一切貴女に申上げようと思ひます。いいえ、申上げねばなりません。これが私の願ひのすべてですから。」

スキュデリは、悲しい痙攣に慄へてゐるオリヴィエに、傍らの椅子を指した。やがて彼はそれに着

いて不幸な來歴を物語り始めた。

ジェネヴァで両親を失ひ孤兒となつた私は、しばらく或る飾匠の家に働いて居りましたが、急に志を立て、この巴里にやつて參りました。カディヤックといふ名は、もうこの時の私の心に根強くはびこつてゐました。

市に着くや直ぐにその有名な飾匠を訪ねて使つて呉れと頼みますと、私の志を冷淡に聞いてゐたカディヤックは、意地の悪るさうな眼で睨めながら私に一つの指輪を作らせました。そこで與へられた仕事を一心不乱に作り上げ、やがて彼に差出しますと、カディヤックはその指輪には一寸眼を觸れただけで、私の顔を穴の開くまで視つめながら、

「なかなかいい腕だ。俺のところへ來て手傳つたらいいだらう。」と言ひました。

カディヤックの家に來て數週間経つた或る日のこと、田舎に行つてゐた一人の娘が歸つて來ました。あゝ、言はずと知れたそれはマデロンでした。一目見たその時より、私の胸は張裂けるばかりの激しい戀に捕はれました。——おゝ、天使のやうに美しい彼女に、あの時の私ほど熱烈な愛を捧げたものがまたとありませうか。

マデロンは足繁く仕事場に来ては、親しげにちつと私を視つめてくれました。私は何んなに狂喜したことでせう。——嚴格なカディヤックの眼を忍んで、たうとう私達はわりない仲になつてしまひま

した。けれど私は、師匠の寵愛さへ得ればマデロンと一緒にして貰へるものと考へたので、一心不乱に仕事を勵みました。と、ある朝のことでした。仕事にかゝらうとする私に師匠はいきなり暗い視線に怒りと蔑みを表はしてつつかゝり、

「出て行け！ 以後きつと俺の眼に觸れるな！ 理由は今更言はずとも知れてゐやう。ただお前が狙ふ果實は、決してお前の手にとゝかないことを知つて置け。」

と言ふなり私を戸口に引摺り出し、慘々な目に會はせて追ひ出しました。

劇しい憤りのために私はその家を見棄てて、間もなく深切な人の世話でサン・マルティンの街はづれの、その家の屋根裏に厄介になることとなりました。けれども私の心は片時も落着かず、夜になればニケエズの街の方にふら／＼と出て來てはカディヤックの家の周りを彷徨ひながら、マデロンが若しや自分の來たのを知つて、窓を開けて呉れやしないかと思つたりしました。カディヤックの家の石塀には、處々半ば壊れかゝつた古い石像が嵌め込んでありましたが、ある夜のこと、いつものやうに其處に彷徨ひ出た私は、その石塀に身を寄せてマデロンの室の窓を窺つてゐますと、急にカディヤックの室に灯がつくのが見えました。もう夜も闌けてゐることゝ不思議に思つてゐるうちに、また灯は消えてしまひました。私は合點がゆかぬながらも、憂鬱に石塀のとある石像に軀を凭れかけました。と、意外にもその石像が次第に動いて來るではありませんか。私はびつくりして跳ね返つて、月のうす明りですかして見てゐますと、石像が段々に廻轉して、眞黒な人影が後から現はれました。見るま

に人影はニケエズ街を下つて行きましたが、街角に來ると急に心もとなく後をふり向いたのです。勿論私は尾行してゐましたので、振り返つた刹那、思はず冷たいものが全身を貫きました。確かに間違ひのないカディヤックの顔ですもの！私にはびつくりしながらも、恐らく彼が夢遊病に罹つてゐるのであらうと思つて跡をつけて行きました。間もなく彼は一軒の家の戸口に這入りました。私は何んな事を仕出かすかと心配のあまり家影にびつたり身を寄せつけて彼の舉動を窺つてゐますと、其處へ拍車をカチカチ音をさせながら一人の士官が通り過ぎました。と、急にカディヤックが身を跳らせてその士官に飛びかかり、あつと思ふ間もなく倒してその上に蔽ひかぶさつたので、私はわれを忘れて馳け寄り、

「親方！何をなさるんです！」

と聲高く叫んで止めると、彼は飛び起きて私を認めるなり、ひと聲、

「うぬ！こん畜生め！」

と嘯鳴りつけひらりと體を交すや、一目散に闇のなかに駆け去つてしまひました。——私の心はまあ何んなでしたらう。悪魔が奇怪な幻影を興へて、私を弄ぶかのやうに思はれました。カディヤックが——マデロンの父が兇惡な殺人鬼だとは！

あくる朝、カディヤックが私の屋根裏の室を訪ねて來ました。さうして嫌惡の情に燃えたつてゐる私の心を、さも落着きと微笑で誤魔化すやうに申しました。

「オリヴィエ。御氣嫌はどうかね。實は、も一度俺の仕事場に歸つて來ては呉れまいか……。お前を追出したことは、ほんたうに失敗だつた。お前の手助けがなければ何うしても仕事は捗らないんだ。

——さぞお前は怒つてゐるだらう。だがもうマデロンとお前の仲なんか少しも干渉しやしないよ。俺もよくよく熟考してみたが、お前のやうな腕のいい、働きのある、忠實な人間を措いて、何んないい婿も望めないことがわかつた。だから俺と一緒に住んで、ゆくゆくはマデロンを妻にしては呉れないか？」

……たうとう私が再びカディヤックの家に歸るや、オリヴィエよ！と高い歡びの聲もろともマデロンが私の胸に凭れかゝつたこと、私が狂喜のあまり彼女を抱擁して、凡ての神々の御名によつて變らない心を誓つたこと——それらは全く夢のやうに過ぎて行きました。

スキュデリ様。どうぞお聞きつづけ下さいませ。あらゆる人々のうちで最も兇惡な、最ま不幸な男の生涯の秘密は、おひおひ明瞭になつて行くでせう。

——それで、再びカディヤックの家に戻つて來たといふものゝ、私はマデロンの愛によつてさうなつたので、決して彼の恐るべき罪行を手傳つたといふものではありません。いゝえそれどころか、彼の罪業の動機、それを決行する手段等は、私にとつて全く謎であり、心の反目は二人の間に屢々破綻を惹起しました。或日のこと、遂にこの沈黙はカディヤックによつて爆發されてしまひました。

「オリヴィエ。お前とかう睨め合つてゐるのはもう堪らなくなつた。どうせ俺の悪事はお前に發かれ

てしまつた今だ。何もかも打明て話してやらう。——お、俺の悪い星！ 彼奴が心の中で俺に恐い所業を強ひるのだ。俺は彼奴を打負かす力を持たない——人はよく、妊婦が何か強く感動すれば、その感じが胎児にまで射して、その子の一生につき纏ふといふが、全く俺の場合はその迷信は眞實なんだ。俺がまだ胎にゐるとき、母親は寶石に心を牽かれたが因で人をあやめて、重い病ひの床にいた。間もなく俺は生れたんだ。この出来事がたうとう俺の性質を寶石に熱中させてしまつたのだ。幼い頃から俺はきらきらした寶石や飾に強い執着をおぼえた。年が長じて俺は飾職に身を委ねたが、寶石の眼は人一倍きくし、生れながらに備はつてゐたやうに腕はめきめきと上達して、今ぢや兎も角飾といへばカディヤックの名を思ひ出させるやうにまでなつた。——俺の寶石熱はますます烈しくなつて、遂にはあらゆる寶石の類を獨で占めようといふ欲望をもつたのだ。人に飾を頼まれることは嬉しいが、いざそれを返す段になると俺は悔しさと憤りに燃え立つたのだ。その擧句は、巧みに依頼者の屋敷に忍び入つては、自分の作つた飾を盗んだ。たが、俺の悪い星はまだ俺を深みに引摺り込んで行つた。たうとう俺は寶の持主を殺してしまひたい氣になつてしまつたんだ。——その頃恰度この家を買つた。オリヴィエ、お前も知つての通りこの家には秘密の通路が出来てゐた。昔まだこの家が寺であつた時、淫らな坊主が工夫したものだと言はれて賣手が俺に教へた。お、この通路がどんなに俺の悪事に思ひがけぬ手助けをしただらう？ ——俺は人を殺した。人を殺した後の安堵、満足——それは俺にとつて言ふにいはれぬ快感だつた。——だがオリヴィエよ。俺には人並の情けがないわけではな

いのだ。時々客の頼みに應じないといふのも、その人を殺したくないからなのだ。——カディヤックは懺悔を終ると、私を寶の間につれて行きました。それはやはり秘密に作られた窖で、數かぎりなく積み陳べられた飾の寶石の光りは、言葉通り眼を欺きました。「マデロンと祝言をする日に」其處で彼は申しました。「俺の死んだあとで、この寶をみんな打毀してしまふことを約束してくれ。こんな血腥い品をお前達に繼がせたくはない。」と。……長い間この巴里の人々を脅かしてゐた竊盗團とは、實はカディヤック一人の仕業に過ぎなかつたので御座います。——カディヤックの言葉を聞いてからといふものは、私の心は恐しい罪の迷路に引摺り込まれ、愛と憎しみ、歡びと慄きに掻きまわられて、幾度逃げようとし死なうとしましたことか。けれどマデロンのことを想へば、何でそんなことが出来ましたでせう！ スキユデリ様。貴女はさぞや私の弱いころをお咎めなさいませう。けれどもその報いはもう存分に受けてゐるでは御座いますか！ この無實の罪に立つた今の私の身を御覽下さい！
或る日カディヤックは宮中に饗はれて、歸つて來ますと大變機嫌よく、「今日はもう仕事は止めだ。それよりか巴里で一番けだかい貴婦人のために一杯やらう。」と言ひながら盃を飲み乾すと、

人目を忍ぶ通ひ路に、寄る白波さくといへば、
思ひの海に浮き沈み、慕ふ甲斐こそなかりけれ。

と歌に出して、その日マントノン公爵夫人の客間で、貴女がこの歌をお詠みになつた模様を逐一話し出しながら、大さう感激してゐるので御座います。さうして彼がなほも言ひ足しましたのには、
「何と有難いお心ぢやないか、オリヴィエ。そこで俺は、何かお禮の品をスキュデリ様に差上げて、嬉しい氣持を傳へようと思ふんだが、どうだ一つ頼みを聞いては呉れないか？ 頼みといふのは、あの暗殺された英國のヘンリエット女王様から御用を承つた儘になつてゐる飾を、人殺しの仲間からといふ名でお前に届けて貰ひたいのだ。あの飾は俺の一番珍重してゐるもので、今それをあの方に捧げることは俺にとつて澤山の意義がある。——お前は何う思つてゐるか知らないが、俺の心の中はいつとも悪い星の邪念と、それから逃れようとする跳きで戦亂の有様なのだ。俺はこの間もサン・テウス・タッシュのお寺に捧げ物をして、悪魔退散を願はうとしたのだが、悪い星に妨げられて望みを達することは出来なかつた。だから今度は恰度いい機會にあの惠深いスキュデリ様の心に捧げ物したら、きつと悪魔も力を失ふと思はれるんだ。」

私はスキュデリといふお名前を聞いて急に心が展けて行くやうな氣がしました。幼ない時分の幸福な畫が、美しい色に彩られて目の前に浮び出ました。私は惑ふことなく彼の頼みを引き受けて、この機會に貴女に見えアンヌのひとり息子と名乗つて、果敢ない身の上を打明けようと思ひました。貴女の賢いお心ならば、マデロンとカディヤックから二様の責苦を與へられてゐるこの私の煩悶を、きつとお救ひになつて下さると信じたからで御座います——が、この望みも結局遂げられなかつたこ

とは、あの晩のことで御承知のこと、思ひます。けれども私は、何時か一度は達せられる折もあらうと、この望みを棄て、しまひませんでした。

と、突然心配な事が惹き起つたので御座います。カディヤックの素振りが急に變つて、来る日も来る日も鬱いだ顔をして、室の中を彼方此方と歩き廻りながら、譯のわからぬ言葉を呟いては何物か邪念を拂ひ除けようとしてゐるらしいのです。が、たうとうその譯は解けました。ある日、何時ものやうに凝つと何物かを視つめてゐました彼は、ふと、

「あゝ、やつぱりあの飾はヘンリエットの身に着けて置けばよかつた——」

といふ呟きを洩したではありませんか。この言葉は何んなに恐しくひびいたでせう。彼の心がまたも悪魔に捕へられ、脅やかされてゐるのが、私には直ぐと讀めたのです。貴女の命がもはやこの殺人鬼に狙はれて、今や刻々と危地に近づいて行くのが瞭々と見えるではありませんか。そこで私は、兎も角あの飾を彼の手に戻すことが何より一番安全だと思ひましたので、ボンヌフ橋で貴女の車に手紙を投げ込んだので御座います。けれども、いくらお待ちしても貴女はお出でにならず、カディヤックの顔には日一日と決行の色が表はれてくるではありませんか。——ある夜のこと、彼の舉動が充分に疑はれたので、私はたとへ彼の命を絶つても貴女を救はねばならぬと決心して、庭に出て見張つてゐますと、案の定彼は例の祕密の通路から外に出て、サントノレの方に向つて、どんく歩いて行きました。私は高鳴る胸を押し靜めて跡をつけて行きました。と、貴女の家の近くに差しかゝつた時です。

恰度以前私が彼の犯行を目撃した時と同じやうに、拍車を鳴らして一人の士官が向うからやつて來ました。それを認めたカディヤックは忽ち物蔭に隠れて、彼が通りすぎるや矢庭に飛びつきました。私ももう見てはゐられないのでいきなり聲高く叫びながら其處に駆けつけました。と、何うで御座います。もう其處に倒されてゐた一人は、意外にもカディヤック自身ではありませんか。私は餘りのことに愕き慌て、思はず彼の軀に近づきますと、その隙に士官は足早に姿を消してしまひました。——カディヤックは未だ充分息をしてゐましたので、私は傍らに落ちてゐた血に滲んだ短刀を腰に差すと、重い軀を擔いで家に運びました。——これから後のことはすべて貴女の御存じの通りで御座います。

ここまで物語り終ると、オリヴィエは感極まつてスキュデリの足もとに身を抛げ出した。さうして切なさに迸る涙の瞳で凝つと彼女を視つめて、嘆き訴へた。

「スキュデリ様。私を信じて下さい！ 私の唯一つの罪とは、カディヤックの恐しい罪業を訴へないことで、決して人を殺したことがありません。けれども何うして、私に彼の秘密を發くことが出来ませうか。どんな拷問の責苦を受けたとして、斷じてそれを隠し通して見せます。考へて下さいまし。一旦埋められた處から掘り出された上、掟の通り恥を人々の前に曝される父親の屍骸を見た時の、マデロンの心は果して何んなで御座いませう。——たとへ私が今死刑にあつたとて、マデロンは私の無罪を信じて懇ろに悼んで呉れませう。さうして時が経てば自然と哀しみも和らげられるでせう。いい

え、父親の罪を知つて悲嘆に暮れる戀人の姿を見ることなどは私に出来ません。——スキュデリ様。貴女は凡てを知つて下さいました。私は本望です。ただ最後に一言なりとマデロンの身をお知らせ下さいませ！ お願ひです。」

スキュデリは突然マルチニエールを呼んだ。程なくマデロンが室に這入つて來た。彼女はオリヴィエの姿を見ると、思はず駆け寄つて、彼の首に縋りついた。

「もういいわ！ お前が此處に居るんですもの。——妾は前から氣高いスキュデリ様がお前を救つて下さることを知つてゐたのよ。」

マデロンは幾度もかう叫んだ。オリヴィエはオリヴィエで、彼の運命も、身にさし迫つた悲しいことも總て忘れた。二人は邂逅の嬉しさの餘り、堅く抱擁し泣き合つた。

やがて曙の光がほのぼのと窓から射し込んで來た頃、デグレエは室の扉を敲いてもう囚人を連れて行く時刻だと注意した。愛する人達は互に、身を裂かれるやうに別れねばならなかつた。

オリヴィエが初めてこの家に来た時から、何とはなしにスキュデリの心を捉へてゐた豫感は、今や全く怖い方法で眞實となつた。かつて愛しんだアンヌ・ギョオオの息子が、逃れがたない秘密の囚となつて死に就かうとしてゐる。——戀人の歎きを見るよりは、潔く罪に死なうといふ若者の健氣な心に、スキュデリは深く感動し、何んな犠牲を拂つても此戀人同志を救ひ出さうと決心した。が、

いざとなると、彼女は手段に窮してしまはねばならなかつた。

あらゆる計畫が企てられては破壊されて行つた。彼女はラ・レニーにも、證據は或る事情で言はれぬが、オリヴィエの身は全く潔白であることを反覆して陳べたが、法衙は人の秘密を保護するものでないと、——ラ・レニーは飽までも強硬に撥ねつけて、いづれ嚴しい拷問を彼の身に加へてその秘密を發いて見せると言つた。この言葉に一層彼女の心は掻き亂された。或日、遂に意を決した彼女は、當時其鴻學清廉のため最も名の高かつたピエール・アルノオ・ダンデイリといふ辯護士の許を訪れ、オリヴィエの秘密に觸れない程度で逐一物語り、援助を求めた。けれどもダンデイリはすべてを聞き終つた後、オリヴィエの言葉には未だ充分疑念を挾む餘地のあること、ラ・レニーの處置は司法上決して残酷でないこと、若し拷問から彼を救はうとすれば、今少し綿密に彼がカディヤック殺害當時の真相を自白することによつて、新しい發見の手掛りを與へねばならぬと、この事件に斷定を下したのであつた。

最後の希望も裏切られたスキュデリは、深い悲しみにかき暮れて、室の片隅に夜更けるまで坐つてゐた。と、其處にマルチニエールが這入つて來て來客の刺を通じた。その上には「近衛大佐伯爵ド・ミオサン」と認めてあつた。

不意の訪客は、軍人らしい潤達さで深夜の訪問を詫びると直ぐに、オリヴィエ・プリュソンの一身上に就いて來た由を申し述べた。スキュデリは急きたて、その用件を追つた。この興奮した彼女の態

度を見ると、伯爵は急に微笑みかけて言葉を續けた。

「世間の人が皆プリュソンの罪を確だと信じてゐるに抱はらず、ただ貴女のみがそれを極力否定していらつしやることはよく承知して居ります。がこの私も、貴女とは違つた意味で、彼がカディヤックの死については無罪であることを信じてゐるのです。否、私ほどあの殺害事件の真相に通曉してゐる者は恐らくありませんまい。」

「まあ——何うぞ早く仰有つて下さい！」

老嬢は思はず絶叫した。

「貴女のお宅の近くで老いた飾匠をあやめた者は、何を隠さうこの私で御座います。」

「えつ！ 貴方が——貴方がですつて！」

「左様。しかも私はこの事を誇りとしてゐる者です。——あの頃恰度私はカディヤックに飾を一つ頼んだのですが、彼が依頼品を渡す時の怪しい態度といひ、私の下僕に飾の贈りさを訊ねたこと、いひ、私は全く彼を訝しむやうになり、果ては彼が、あの長い間巴里の人心を震撼させた大盜か、或ひはその麾下に違ひないと目星をつけたのです。この想像は後に的中されたわけですが——そこで私は、彼の奪略にうまうまと陥入つたやうに行動し、あの常套手段たる胸の一刺しを巧に避けて、兎も角彼と對當の勝負をする事が一番いい方法だと考へたので、いよいよ夜が來ると胸衣の下に胸甲を着けて出て行きました。これ程簡単な方法に氣がつかず、幾人とも果敢ない死を遂げたとは全く不思議

議に思はれます。——さうしてたうとうカディヤックは私の策略にかかつてしまつたのです。」

「それなら——何故表向きにお届けにならなかつたのです？」

「いや、そのお言葉は御尤もですが、私としては厄介な裁判沙汰に捲き込まれなくなかつたのです。兎も角カディヤックは、篤行と正直で欺き通してゐたのですから、意外な私の言葉を恐らく人は信じないでせう。たとへ私の地位をもつてしたとて、くだらないラ・レニーとの言ひ争ひのために、一時間だつて犠牲にするのは厭なことですもの。」

「では、無罪のブリュソンを斷頭臺に登らせて黙つておいでになるつもりですか！」

「いや、これはしたり、オリヴィエが無罪ですつて、あの事件については無罪と言はれませうが、彼は、れつきとしたカディヤックの麾下です。死刑は當然の報いです。——私が今日かうしてお訪ねしたのは、貴女がよもやラ・レニーに訴へるやうなことはしないと思ひました上で、ただ、この真相が幾分なりとオリヴィエの身に、利用されはしないかと思はれたからで御座います。」

ブリュソンが無實だといふ確信が、かうも完全に裏書されたのを見ると、スキュデリは悦びのあまりミオサンに凡てを打明て援けを求めた。結局明日になつたらダンデイリを訪ねて彼の智慧を借りようと言はままとまつたのである。

翌朝。ダンデイリは黙々と俯向いた儘、二人の言葉を聞いてゐたが、やがて話が済むのを待つて事件の細いところを念入りに訊き糺した上、特にミオサンには、彼を襲つた人間が正しくカディヤック

であるといふ確信があるか何うか、また、死骸を運び去つた者の顔を今まだ充分見極めることが出来るか、と訊ねた。ミオサンがその二つを肯定すると、彼は徐ろに語り出した。

「オリヴィエの救済は、恐らく普通のやり方では出来ませうまい。彼は戀人のためを思つて事件の真相は極秘にしませうし、またそれを報いたところで、連累罪に問はれて刑罰を受けることに何の變りはない。たとへミオサン伯爵が凡てを自首して出たとて、彼に與へられる制裁は同様でせう。ここで吾の執る最もいい方法は、彼の判決を——否、彼に科せられる酷しい拷問を一日でも延ばして、この際に乗じて或る手段を遂行するのです。と言ふのは、先づ伯爵が監獄を訪問してブリュソンに會ふことです。貴方はそこで彼がカディヤックを擔いで行つた人間であることを確めた上、更らにその足でラ・レニーの處に駈けつけるのです。それから貴方は極めて眞面目に、サントノレ街の殺人事件は、偶然通り合はした自分がその慘劇を目撃したこと、その時、突然又別の一人の男が現はれて、既に殺害された人の上に俯伏して、また息のあることを知ると急いでそれを擔ぎ去つてしまつたことを具さに物語つて更に、その被害者を擔いで行つた男は確かにブリュソンに違ひない旨を陳述するのです。この結果法衙は、直ちに貴方と彼とを對決させ、飾匠の家は綿密に搜索されることになります。その上ブリュソンには再度審問の猶豫が與へられ、拷問は中止といふことになりませう。——で、この隙の手段といふのが頗るむづかしい問題なのです。それは王に凡てを打明け、オリヴィエ自身の決して不明でないことを極力辯明して特赦を乞ふ寸法なのですが、これは勿論スキュデリさんの努力如何で

充分成功する可能性があるものと信じます。私の考へでは恐らくこれより外に方法はありますまい。」
数日の後、ミオサンはダンデイリの言葉に従つて先づオリヴィエ救済の第一歩を踏み出した。さうして伯爵の陳述は間もなく巴里の隅々までも知れわたつた。と同時に、昨日まで兇惡な殺人鬼として呪はれてゐたオリヴィエが、今や殘虐な法術の無殘な犠牲だと反つて極度に同情されるやうになつた。ニケエズ街に住む人々は急に彼の篤實な行ひを想ひ出した。ラ・レニーの館の前には常に群衆が押しかけて。「オリヴィエ・ブリュソンを返せ！ 彼は無罪だ！」と叫びあひながら石を投じた。
一方スキュデリも、與へられた自分の責務を遂行しようとして屢々宮廷に參内したが、ダンデイリが言つたやうに其處には頗る難關が控へてゐた。と言ふのは、王に對する一切の請願を取次ぐことになつてゐるマントノン夫人が、この事件を徹頭徹尾不愉快視してゐる様子なので、王直接に事を運ばねばならぬといふわけであつた。けれどもこの苦心がたうとう酬いられる日が來た。彼女は或る日喪服とカディヤックの寶石で盛裝して、巧に王の好奇心を惹きつけ、カディヤックの死體が発見された朝恰度彼の家の前を通り合せたといふほんの顛末な話を緒にして、その天使のやうなマデロンの自分と與へた悲痛な印象、遂に彼女をデグレエの手から救ひ出したことなどを語り出し、特にマデロンの境遇については、王の同情を唆るやうに説明された。王は暫しスキュデリの熱辯に恍惚として、全く彼女が次に何を訴へ出るかに氣がつかなくなつた位であつた。と、頃は上々と思つたのか老嬢は矢庭に王の足下に跪いて、オリヴィエ・ブリュソンに對する特赦を歎願した。

「何事ですか？」と王は老嬢の手をとつて椅子に導きながら、やや聲高く言ひ放つた。
「あの恐ろしい男の話が、何で眞實と言はれやう。」
スキュデリは怯ますなほも、ミオサンの陳述や家宅搜索のことを諄々と説き、オリヴィエの潔白なこと、マデロンの貞淑なことに就いて熱誠をもつて辯じ立てた。やがて王は、この潑刺たる老嬢の言葉に聊か感動を覺えた様子で、兎も角マデロンとやらに會ひたいと一言いひ洩すや、老嬢は待つてたとばかりに外に向つてマデロンの名を呼んだ。彼女はかうした事もあらうと豫期してゐたので、既に車のうちにマデロンを伴つて來たのであつた。——マデロンは靜々と客間に這入つて來るや、忽ち王の足下に俯伏し、氣遣ひ——驚愕——畏敬——愛——苦痛の凡ゆる感情が一時にこみ上げて來るのを覺えた。彼女の頬は燃え立ち、瞳は透明な涙の眞珠で輝いたが、それは時々絹の睫を通して白い胸の上に落ちた。王は、まるでその淋しい美しさに眩惑せられたやうに、彼女の手を執るとそれを唇に當てようとしたが、ふと氣がついて手を離した。マデロンは恐る恐るダンデイリによつて書かれた願書を王の前に差出した。王は讀み終ると頷きながら彼女に言つた。
「お前がオリヴィエの無罪を確信してゐるのはよくわかるが、いま一應ラ・レニーとも相談して見の上、なるべくお前を悲しませないやうにして上げよう。」
やがてスキュデリとマデロンの二人は、慈悲深い拜閱を王に謝し、なほひたすら裁決の日を鶴首して待つと歎願して引下つた。

數日を経て王の沙汰はなかつた。が、スキュデリがダンデイリの好意で仄かに聞くことの出来たのは、王が或る日ミオサン伯を召して長い間密談をしたことと、王の最も信任の厚い侍武官であるポントンズが、オリヴィエを訪うた上或夜多數の部下とともに、カディヤックの家に這入つて長い間居たといふことであつた。これによつて王が自ら事件の實情を調べさせたことは確かであるが、何故に裁決を長く躊躇してゐるのかはわからなかつた。

殆ど一月も経つた頃、スキュデリは王の言傳をマントノン夫人の使より受取つた。それは今夜いつもの室で面會したいといふ短かい文句であつた。老嬢の胸は高鳴つた。彼女は多分ブリュソンの事件がいよいよ決したのだらうとマデロンに告げた。これを聞いたマデロンは狂氣のやうに雀躍しながらも、なほ王がオリヴィエの無罪を確信するやうにと、凡ゆる神々に熱心に祈つた。

しかし王は例の事件を全然忘れてしまつたかのやうであつた。といふのは、王はいつものやうにマントノンとスキュデリを前に愉快な話をしながら徒に閑を潰してゐて、少しもオリヴィエの身には話に移らなかつた。老嬢の心は期待を裏切られた憂鬱のために全く閉されてゐたが、やがて少し経つと客間にポントンが現はれて、王の耳に口を寄せ何事かを囁いた。スキュデリの心のうちは恐れに戦いた。と、王は急に微笑みながら口を開いた。

「スキュデリ、お芽出度う。オリヴィエ・ブリュソンはたうとう自由の身になつたよ。」

老嬢は急に眼に熱いものを感じながら、思はず王の足もとにひれ伏した。けれども餘りの嬉し

さに彼女は何事も口にする事は出来なかつた。

「早くお歸りなさい。かうして私にお禮を言ふよりは一刻も早く家に歸つて、もつと大きな感謝を請けたらいい。恐らく今ごろは幸福なオリヴィエが戀人を抱擁して、貴女の歸るのを待つてゐやう。」

王はスキュデリを扶け起しながらなほ言ひ足した。
「ポントンに一千ルイ持たさせるから、儂の名で嫁資としてマデロンに贈つてもらひたい。彼女はブリュソンと結婚をしてもよろしい。だが、それが濟んだら早々この巴里から離れて貰ふ。これは儂の意思だから。」

バプチストとマルチニエールに迎へられて家にはひると、戀人同志はスキュデリの足許にひざまづいた。

「スキュデリ様。妾の夫をお助けして下さる人が、貴女様よりないことは知つてゐました！」
と、マデロンが叫ぶと、續いてオリヴィエは顔を輝やかせて叫んだ。

「お母さま。貴女に置いた信頼はしつかと心に留つてゐました。」
二人は感激して老嬢の手に接吻し、互ひに抱擁して感謝と喜びを表した。彼等がこのやうな幸福は今までの艱苦を償うて餘りあつた。

幾日も経たないうちにこの戀人たちの華燭の典は擧げられた。さうした後、よし王の命がなかつたとしても、ブリュソンはこの都に永住する心はなかつたのであつた。なぜなら、彼の瞳にうつる巴里

は、これから先幾度かカディヤックの恐しい罪惡を想ひ出させるであらうし、許多の人々が彼等の秘密を意地悪くも發いて、永久に平和な生涯を擾すかも知れなかつた。二人は直ちにスキュデリの祝福に伴はれて、オリヴィエの故郷ジエネヴァに出發した。

其處で彼等は王の贈物によつて豊かに暮した。剩つさへかつてカディヤックに見込まれた技術はますます研鑽を積み、其後暫くは飾匠といへば、人は誰でもジエネヴァのオリヴィエ・ブリュソンを唱へるやうになつた。

ブリュソン夫婦が故郷に移つてから一年ほど経つた頃、大僧正アルロア・ド・ショヴァロンと議院辯護士ピエール・アルノ・オ・ダンデイリとの署名の下に、次のやうな公告文が表はれて巴里の人々の注意を喚んだ。

近時或る悔悟せし罪人が懺悔の保證として寺院に幾多の贈品を獻じたり。誰しも、一千六百八十年までに主として公道に於いて、殺人的襲撃に遇ひ粧飾品を奪略せられし者はダンデイリを訪ふべし。詳かに該品の形標を述べし上、現在の贈品と符合し何等疑ひなき時は即時交付するものとす。

この公告文によつて議院辯護士の許に來た人々は、忙がしく奪はれたる品を取り戻して驚歎した。

さうして所有者の既にないと確定した残りの粧飾品はすべてサン・テュスタッシュの寶庫に收められたさうである。

— 終 —

讀者諸君の参考までに全部の原名を掲ぐ。

アラン・ポー集

The Gold-Bug (黄金蟲) / The Murders in the Rue Morgue (モルグ街の殺人) / The Mystery of Marie Roget (マリイ・ロオジエ事件の謎) / The Purloined Letter (竊まれた手紙) / The Descent in to Maelstrom (メエルストロウム) / M.S. Found in a Bottle (瓶の中より見出された手紙) / The Oblong Box (長方形の箱) / The Premature Burial (早過ぎた埋葬) / The Masque of Red Death (赤き死の假面) / The Black Cat (黒猫譚) / Hop-Frog (ホップ・フログ) / The Pit and the Pendulum (陥穽と振り子) / The Fall of the House of Usher (アッシュヤア館の崩壊) / The Tell-Tale Heart (物云心臓) / William Wilson (キルアム・キルスン)

アムブローズ・ビヤース集

A Diagnosis of Death (アモハンノ葬送曲) / One Summer Night (夏の一夜) / One of Twins (雙生兒)

アマテウス・ホフマン集

"Fräulein Senderi" (スキエテリ嬢の祕密) / Der Sund Mann (砂男)

昭和四年四月一日印刷
昭和四年四月三日發行



世界大衆文學全集第三十卷
ポー、ホフマン集

譯者 江戸川 亂歩

發行者 山本 美

印刷者 竹内喜太郎
東京市牛込區板町七番地

發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改 造 社

振替口座東京入四〇二番
電話芝(43)自一一二一
至一一二四番

(刷印社會式株刷印清日)



